

いわゆる軽視・謙遜のナドの **deontic** 用法と **epistemic** 用法

言語学・応用言語学専攻

1LT17103M

2017（平成 29）年入学

藤田萌恵

2021（令和 3）年 1 月提出

要旨

本論文では、いわゆる軽視・謙遜用法のナドを取り上げる。

- (1) a. よりにもよって、テストでカンニングを繰り返し、さらに遅刻ばかりする太郎**な**
どが生徒代表に選ばれた。
- b. お金持ちで舌が肥えている太郎は、インスタントラーメン**など**食べたことがな
い。

(1)はどちらも軽視・謙遜のナド文である。(1a)はナドによって「素行が良くない太郎が生徒代表に選ばれるべきではない」という *deontic* モダリティの意味が付されている一方、(1b)は「べきではない」という解釈はできず、「(太郎はお金持ちなので) インスタントラーメンは食べたことがないのが当たり前だ」という *epistemic* モダリティの意味が付されている。このように、軽視・謙遜のナドが文にもたらす意味には2種類ある。本論文では、軽視・謙遜のナドには「*deontic* モダリティと共起するナド」と「*epistemic* モダリティと共起するナド」の2種が存在すること、そして、それぞれの文構造にも違いがあることを主張する。井戸(2017)等では本論文と異なる観点で軽視・謙遜のナドを2種類に分けているが、その問題点を指摘しつつ、本論文の主張に基づくと井戸(2017)等が指摘する軽視・謙遜のナドの現象も説明できることを示す。

目次

1. はじめに	1
1.1. 問題点	1
1.2. deontic モダリティと epistemic モダリティ	3
1.3. 統語意味論	4
2. ナドの意味的側面に基づく分類	9
3. deontic 用法のナド構文	11
3.1. deontic 用法のナドの観察	11
3.2. deontic 用法のナドの統語分析	12
3.3. (付録) deontic 用法のナドの派生	18
4. epistemic 用法のナド構文	24
4.1. epistemic 用法のナドの観察	24
4.2. epistemic 用法のナドの統語分析	28
4.3. (付録) epistemic 用法のナドの派生	34
5. deontic 用法のナドと epistemic 用法のナド	39
5.1. 本論文の主張のまとめ	39
5.2. 井戸(2013, 2014, 2017, 2018)との比較	42
5.3. Yes-No 疑問文の作成	48
5.4. サエの後接	50
5.5. コピュラの後接	52
5.6. 格助詞の後接	53
6. おわりに	57
参照文献	60

1. はじめに

1.1. 問題点

井島(2008)は(1)に見られるナドの用法を「〈軽視・謙遜〉の用法」と呼んでいる。¹

- (1) こんな風に見られていることを、葉子は気付くはずがなかった。彼女はただ病人に心を奪われていたが、たとえ島村の方へ振り向いたところで、窓ガラスに写る自分の姿は見え、窓の外を眺める男**など**目にも止まらなかっただろう。(川端康成『雪国』40)

[井島 2008: 74, (46a)]

本論文では、(1)のようないわゆる軽視・謙遜のナドを扱う。井島(2008)が「〈例示〉」と呼ぶ、(2)の用法のナドは含まない。

- (2) 二人は文壇の話や、自分達の仕事の話や、読んだ本の話**など**をした。(武者小路実篤『友情』25)

[井島 2008: 73, (45c)]

本論文では、これ以降特に記述のない場合、ナドは(1)に現れるようないわゆる軽視・謙遜のナドを指すものとする。

軽視・謙遜のナドに関する先行研究自体はあるが、意味的違いの切り口から軽視・謙遜のナドを詳細に研究したものは管見の限りでは見当たらない。しかし意味に着目することで、現在一括りにされている軽視・謙遜のナドのもたらす解釈には複数種類あることが窺える。

- (3) a. 指定校推薦には文武両道で人望も厚い佐藤が選ばれると思っていたのに、伊藤先生が、自分の部活動生だからという理由で山田**など**を推薦した。
b. 二〇〇三年三月期ですら赤字なのに、金融庁の要求通り引き当て金を手当てしては、黒字決算**など**夢のまた夢である。 [「UFJ 消滅」]

¹ 井島(2008)は、ナドの軽視・謙遜の用法について山田(1908)がすでに指摘していると述べている。しかし、山田(1908)での記述は次の通りであり、この記述がナドの軽視・謙遜の用法の典型例であるかどうかは議論の余地があると考えられる。

- (i) (イ) おのれ**など**はさることなし。
(ロ) おのれ**ども**はさる事なし。

の二例に於いて如何なる感じを讀者に與ふるか。(イ)は傲慢不遜の感と與へ、(ロ)は謹慎謙讓の意を具するにあらずや。 [山田 1908: 581]

(3)の文は、どちらも軽視・謙遜のナドを用いている²。ここでナドがもたらす意味を分かりやすく見るために、(3)の各文からナドを除いた例と比較する。

- (4) a. 指定校推薦には文武両道で人望も厚い佐藤が選ばれると思っていたのに、田中先生が、自分の部活動生だからという理由で山田を推薦した。
- b. 二〇〇三年三月期ですら赤字なのに、金融庁の要求通り引き当て金を手当てしては、黒字決算は夢のまた夢である。

ナドを用いている(3a)と、ナドを用いていない(4a)とを比較する。(4a)では「(話者は佐藤が指定校推薦に選ばれると思っていたが)伊藤先生が自分の部活動生だからという理由で山田を推薦した」という事実が単に述べられている。一方ナドを用いた(3a)からは、(4a)の内容に加え、更に「山田を推薦するべきではなかった」という話者の評価を読み取ることができる。この評価は、ナドによってもたらされたものである。続いて、ナドを含む(3b)とナドを除いた(4b)を比較する。(4b)は「(金融庁の要求通り引き当て金を手当てしては、)黒字決算は夢のまた夢だ」という命題を単に表している。一方(3b)は、(4b)の内容に加えて「黒字決算になることはあり得ず、当然、黒字決算は夢のまた夢であるのが当たり前だ。」という話者の判断が含まれている。この判断もまた、ナドによるものである。仮に(3a)に(3b)と同じ「当たり前である」という判断がもたらされるとすると「伊藤先生が山田を推薦したのは当たり前だ」となるが、(3a)からこの解釈は読み取れない。同じく(3b)に(3a)の「べきではない」という評価を当てはめてみる。「黒字決算は夢のまた夢であるべきではない」となるところだが、この解釈もまた不可能である。つまりナドがもたらす2つの意味には互換性がない。

以上より、軽視・謙遜のナドがもたらす意味は常に同一とはいえないが、軽視・謙遜のナドの意味はこれまで詳細に論じられていない。そこで、本論文では次の問題に取り組む。

- (5) 軽視・謙遜のナドは、意味的側面から見るとどのように分類できるか。また、それぞれの統語的特徴はどのようなものか。

本論文が意味的側面を踏まえた分類を新たに提示することによって、ナドを意味と構造の双方から捉えられるはずであり、さらに従来の研究で説明できていなかった指摘点の説明を試みる。

本章では、次節以降で本論文の考察に用いる概念や用語を紹介する。2章では、軽視・謙遜のナドによってどのような意味が加わるかを記述し、2種類のモダリティが関与して

² (3a)は例示のナドでの解釈も可能ではあるが、本論文ではナドをナンカに置き換えられるような、軽視・謙遜の用法のナドの解釈を採用し、論を進める。

いることを示す。3章と4章ではその2種類のナドをそれぞれ取り上げる。各ナドについて、まずは意味的特性の記述をし、続いて統語分析を行った上で、構造的特性を考察する。5章では軽視・謙遜のナドについての先行研究である井戸(2013, 2014, 2017, 2018)の主張を紹介し、その問題点を指摘しつつ、本論文の提案に基づくと、先行研究で指摘されている現象も説明できることを示す。6章では本論文のまとめと、今後の課題を提示する。

1.2. deontic モダリティと epistemic モダリティ

本論文では、軽視・謙遜のナドの考察に deontic モダリティと epistemic モダリティを導入する。モダリティの概念を、中右(1994)は(6)のように定義している。

(6) 話し手の発話時点における心的態度 [中右 1994: 20]

この「話し手」とは発話主体のことを、「心的態度」とは人間の知情意を包括するあらゆる心理作用のことを、そして「発話時点」とは瞬間的現在時のことを指している。

モダリティにおいて deontic モダリティと epistemic モダリティを重視したり、モダリティをこれらに二分したりしてきた研究者は多い。von Wright (1951)は「the alethic modes」、「the epistemic modes」、「the deontic modes」、「the existential modes」の4種の法性を提唱しているが、Palmer (1986)はその中で特に「the deontic modes」と「the epistemic modes」が重要だと主張している。また中右(1994)は、モダリティを「D モダリティ」と「S モダリティ」に大別しているが、これらはそれぞれ deontic モダリティと epistemic モダリティに対応している。

deontic モダリティを、黒滝(2005)は(7)の通り定義している。

(7) これから起こると目される潜在的な出来事に対する文の主語の意志・義務・許可・必要性や能力、または主語以外の意志に基づいて主語が行為すること [黒滝 2005: 12]

(8) Employees **must** feed the animals twice a day. [黒滝 2005: 12, (1-4)]

(8)は deontic モダリティの例であり、must は「しなければならない」という義務を表している。

epistemic モダリティは、高橋(2013)によって(9)のようにまとめられている。

(9) 話し手がある出来事や状態が必然的であるという判断する [高橋 2013: 23 (原文ママ)]

(10) This **must** be one of the finest views of the whole processional route. [高橋 2013: 23, (8)]

(10)は epistemic モダリティの例であり、用いられている **must** は「に違いない」等の推量を表している。

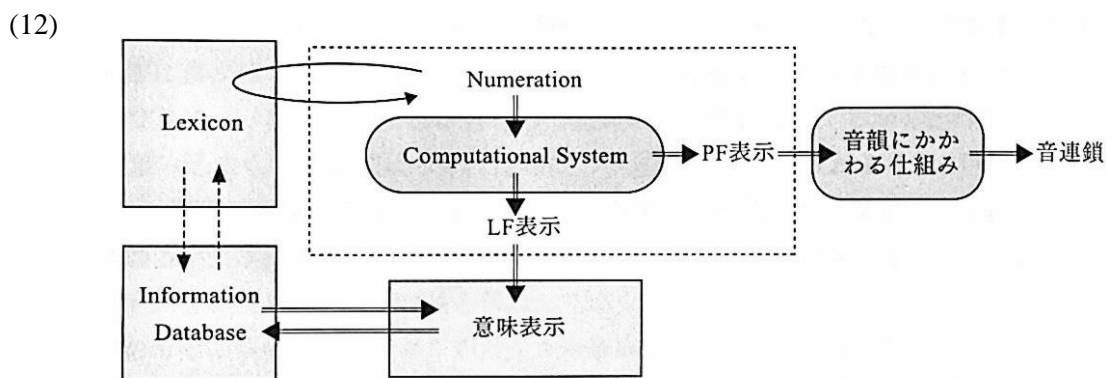
ここで、2つのモダリティについて構造的特徴も見ておく。Palmer(1986)は deontic モダリティと epistemic モダリティの違いについて、次のように述べている。

(11) The latter (=epistemic モダリティ) is concerned with belief, knowledge, truth, etc. in relation to proposition, whereas the former (=deontic モダリティ) is concerned with action, by others and by speaker himself. [Palmer 1986: 96 (括弧内は筆者)]

Palmer(1986)が指摘する deontic モダリティと epistemic モダリティの違いは、上山(2007)で指摘される *thetic/categorical* の関係に対応している。すなわち deontic モダリティは *description* を表す文と関連し、epistemic モダリティは *Predication* を表す文と関連する。なお、*Predication* は *Subject* と *Predicate* から成るため、epistemic モダリティが表出する文にも *Subject* と *Predicate* が存在すると考えられる。

1.3. 統語意味論

上山(2015)が提唱する統語意味論は、生成文法における *Computational System* の働きを明らかにすることを目標とする。



[上山 2015: 8, (2)]

(12)で用いられている用語の説明を、以下にまとめる。

(13) a. Information Database

私たちの頭の中で「世界知識」が蓄えられているところ
人間がさまざまな思考や推論等をしたるためのベースとなるもの

[上山 2015: 9]

b. Lexicon

頭の中に蓄えられている語彙項目の知識の総体

[上山 2015: 8]

c. Numeration

Lexicon から選び出された、いくつかの語彙項目の集合

[上山 2015: 8]

d. Computational System

Numeration を材料として構築物を作り、それが文の音と意味の解釈の基盤となる

[上山 2015: 13]

e. LF 表示

文の「意味」の基盤となる表示

[上山 2015: 8]

f. PF 表示

文の「音」の基盤となる表示

[上山 2015: 8]

(13)のうち、さらに説明が必要なものに追記していく。まず Information Database は、（認知的な意味での）「object（存在物）」の集合である。

(14) object とは、指標と property（特性）の集合との対、property とは、attribute（項目名）と value（値）との対である

[上山 2015: 9]

(14)に表される object の構造は、(15)の形で記述できる。また、object の具体的な表記例を(16)に挙げる。X から始まる記号は、指標を示している。

(15) {...

<X245, {<attribute1, value1> <attribute2, value2>, ...}>,

property

property

object

...

<X304, {<attribute3, value4> <attribute3, value4>, ...}>,

property

property

object

...}

[上山 2015: 9, (3)]

(16) a. <X24, {<Name, 太郎>, <Kind, 高校生>, <年齢, 18>, <身長, 175 cm>, ...}>

b. <X65, {<推薦する, T>, <Agent, X87>, <Theme, X24>, <Goal, X37>, ...}>³

Lexicon は語彙項目の集合であり、それぞれの語彙項目は統語素性、意味素性、音韻素性のリストであると考えられている。一般形は(17)に示される。

(17) Lexicon における語彙項目の一般形

[[範疇素性, 統語素性, ...], <id-slot, {property, ...}>, 音韻形式]

[上山 2015: 16, (14)]

「{範疇素性, 統語素性, ...}」が統語素性を、「<id-slot, {property, ...}>」が意味素性を、そして「音韻形式」が音韻素性を表している。意味素性では property がどの object に帰せられるものかを指定するために、語彙項目の中に指標の位置を確保する。この位置が「id-slot」と表される。Lexicon に登録される語彙項目の例を(18)に示す。

(18) [[N], <id, {<Name, ジョン>}>, ジョン]

(18)は統語素性に範疇素性「N」が記され、名詞であることを表し、意味素性の property <Name, ジョン>は何らかの object と対応づけられること、また、音韻素性の「ジョン」で発音のされ方を示している。

Lexicon から選び出された語彙項目で構成される Numeration は、次のように定義される。

(19) Numeration

指標と語彙項目を対にしたものの集合

{<指標 1, [語彙項目 1]>, <指標 2, [語彙項目 2]>, ...}

[上山 2015: 14, (8)]

Lexicon に登録された(18)が Numeration に入り、仮に x5 という指標と組み合わせられた場合の表記例は(20)の通りである。

³ attribute に用いられる意味役割には、次のようなものがある。

(i) 意味役割

a. Agent (行為者) : 何らかの行為を意志を持って行う人・生き物。

b. Theme (対象物) : 行為や感情などの対象となるもの、その行為によって状況の変化をこうむるもの。

c. Goal (到達点、目標) : 行為の到達点。対象物の行き先など。 [上山 2015: 35, (1)]

したがって(16b)は、意志を持って推薦したものが X87、推薦されたものが X24、推薦先が X37 であることを表す。

(20) $\langle x5, [\{N\}, \langle x5, \{\langle Name, ジョン \rangle\}, ジョン] \rangle$ [上山 2015: 15, (11b)]

意味素性の property $\langle Name, ジョン \rangle$ が、 $x5$ という object に結び付けられている。なお、(15)と(16)は Information Database における object の登録の場合であり、指標番号の先頭には大文字の X が用いられていたが、Numeration の登録形である(20)の場合は、object の指標番号の先頭には小文字の x が用いられる。

上山(2015)では、Computational System から出力されうる表示を「適格な (well-formed) 表示」、Computational System から出力されえない表示を「不適格な (ill-formed) 表示」と呼ぶ。したがって、Computational System での操作を明示することで適格な表示の集合と不適格な表示の集合が定義されることになる。その方針は、(21)の通りである。

- (21) a. Numeration に含まれる要素には、**解釈不可能素性 (uninterpretable feature)** が含まれうる。
- b. それぞれの解釈不可能素性は、どのような操作を受け、どのような条件のもとで削除されるかが定められている。
- c. それ以上 Computational System の操作が適用できなくなった段階で、解釈不可能素性を含まない表示は適格であり、解釈不可能素性が残っている表示は不適格とする。

[上山 2015: 13, (6)]

Computational System では、Numeration に対して操作を行っていくが、その操作の中で最も基本的なのは、2つの要素を1つにまとめる「Merge (併合)」である。2つの項目に Merge を適用すると、一方の項目の指標、統語素性、意味素性が構築物全体の指標、統語素性、意味素性として継承される。この、継承される方の項目が「主要部 (head)」と呼ばれる。また Merge は(21c)に基づき、表示が不適格になることを避けるべく、すべての解釈不可能素性を消すことができるように適用されていく。本論文で用いる解釈不可能素性を、以下に挙げておく。

- (22) ★
削除規定 自分が主要部として相手 β と Merge した場合、 β の指標で置き換えられる。

- (23) ●
削除規定 相手 β が主要部として Merge した場合、 β の指標で置き換えられる。

[上山 2015: 227]

(24) ★_α (α = ga, wo 等)

削除規定 Merge 相手 β が統語素性 α を持っているときのみ、β の指標で置き換えられる。

条件 property の value の位置に ★_α がある場合は、自分が主要部でなければならない。 [上山 2015: 19, (25)]

(25) ★_{target}

削除規定 Merge 相手 β が統語素性 <target, id> を持っているときのみ、id の指標で置き換えられる。

条件 property の value の位置に ★_{target} がある場合は、自分が主要部でなければならない。

(26) <target, id>

継承規定 主要部からでも非主要部からでも継承される。

削除規定 Merge 相手の ★_{target} を置き換えたら削除される。

生成文法では、Computational System において Merge に加えて Move (移動) という操作も行われると考えられてきた。Merge に基づく理論の場合には、Move においても一気に長距離を移動することは許されず、短距離を連続的に移動していく必要があるが、統語意味論では、これを Pickup と Landing という2つの操作で実装している。Pickup とは移動の元位置で起こる操作であり、ここで一度移動要素をひとまとめにして統語素性の中に取り込む。その上で、移動先の位置で Landing という操作を適用し、統語素性に取り込んであった移動要素を新たな Merge 相手として展開する。本論文では4章において、この Pickup と Landing を用いている。

以上の考えや用語に基づいて、本論文では統語分析をする。

2. ナドの意味的側面に基づく分類

1章の(3)でも言及したように、軽視・謙遜のナドがもたらす意味には複数ある。

- (3) a. 指定校推薦には文武両道で人望も厚い佐藤が選ばれると思っていたのに、伊藤先生が、自分の部活動生だからという理由で山田**など**を推薦した。
b. 二〇〇三年三月期ですら赤字なのに、金融庁の要求通り引き当て金を手当てしては、黒字決算**など**夢のまた夢である。 [「UFJ 消滅」]

(3a)と同様に「べきでない」という評価が現れるナド文の例は、他に(27)などがある。

- (27) a. 私の母は、先日熱心なセールスに押されてダイエットサプリメント**など**を新たに契約してしまったという。
b. 医者は無理をすれば再発するといったが、二年もすぎれば、いつのまにか元の木阿弥で、私はせっせと仕事をはじめ、また徹夜**など**するようになっていた。 [「新寂庵説法」]

(27a)には「私の母は（熱心なセールスに押されたからといって）新たにダイエットサプリメントを契約するべきでなかった」という評価が、(27b)には「無理をすれば病気が再発する状況にあるのに、徹夜をするべきでない」という評価がナドによってもたらされている。

(28)は、(3b)と同じく「当たり前だ」という判断がもたらされる類の例である。

- (28) a. エース社員が集められるという今回の重大プロジェクトに、鈴木**など**呼ばれなかった。
b. ちなみに富田さんは一九二三年生まれです。それに比べれば、私**など**まだまだ若いのです。大いに山歩きを愉しみましょう。 [定年後は山歩きを愉しみなさい]

(28a)は、「エース社員が集められるような重大プロジェクトに、（仕事ができない）鈴木は呼ばれないのが当たり前だ」という判断が、(28b)には「一九二三年生まれの富田さんに比べれば、私は（山歩きをする年齢としては）まだまだ若いのが当たり前です」という判断が含まれている。

(3a)、(27)には「すべきでない」という文の主語の義務に関するモダリティ、すなわち deontic モダリティがある。また(3b)、(28)には「当たり前である」という出来事や状態に対して話者が必然的とみなすモダリティ、つまり epistemic モダリティがある。調査の限り、軽視・謙遜のナドはすべて deontic モダリティと epistemic モダリティのどちらかを有していた。

本論文では、軽視・謙遜のナドのうち deontic モダリティを付すナドを「deontic 用法のナド」、epistemic モダリティを付すナドを「epistemic 用法のナド」と名付け、区別する。

3. deontic 用法のナド構文

3.1. deontic 用法のナドの観察

deontic 用法のナドの意味や focus、scope を考察する。deontic 用法のナドを用いた文と deontic 用法のナドを除いた文を比較することで、deontic 用法のナドを用いている文のみに現れる意味が、deontic 用法のナドの意味であると推定できる。(29)は deontic 用法のナド文、(30)は(29)から deontic 用法のナドを除いた文である。

- (29) a. 指定校推薦には文武両道で人望も厚い佐藤が選ばれると思っていたのに、伊藤先生が、自分の部活動生だからという理由で山田**など**を推薦した。 (再掲(3a))
b. 私の母は、先日熱心なセールスに押されてダイエットサプリメント**など**を新たに契約してしまったという。 (再掲(27a))
c. 医者は無理をすれば再発するといったが、二年もすぎれば、いつのまにか元の木阿弥で、私はせっせと仕事をはじめ、また徹夜**など**するようになっていた。
[「新寂庵説法」 (再掲(27b))]
- (30) a. 指定校推薦には文武両道で人望も厚い佐藤が選ばれると思っていたのに、伊藤先生が、自分の部活動生だからという理由で山田を推薦した。 (再掲(4a))
b. 私の母は、先日熱心なセールスに押されてダイエットサプリメントを新たに契約してしまったという。
c. 医者は無理をすれば再発するといったが、二年もすぎれば、いつのまにか元の木阿弥で、私はせっせと仕事をはじめ、また徹夜するようになっていた。

(29)と(30)を比較すると、ナドが用いられている(29)には「すべきでない」という deontic モダリティの意味が付されることは既に確認した通りである。たとえば(29a)は、「伊藤先生が山田を推薦する」ことに「べきでない」という意味が付されていた。しかしナドの意味的役割は、deontic モダリティの意味を付すことだけではない。当該ナドは、deontic 用法のナドである以前に軽視・謙遜のナドでもあるからだ。したがって、ナドが何に軽視・謙遜の意味を与えているのかを考える必要がある。(29a)におけるナドの場合、ナドの前部にある「山田」を軽視している。そしてこの「山田」は、(29a)で「伊藤先生が山田を推薦する」というデキゴトが「すべきでない」と評価される根拠になっている。すなわち「伊藤先生が推薦した」こと自体がすべきでないことなのではなく、あくまで推薦する対象が「山田」であることが不適切だと評価されているのである。

ここでナドの前接部を P、ナドの後部を Q とすると、deontic 用法のナドの機能は次のようにまとめられる。

(31) deontic 用法のナドの意味的職能

deontic 用法のナド文「P ナド Q」の場合、ナドを含まない文に対して以下の2つの意味が加わる。

- a. 話者にとって、P は軽視・謙遜の対象である。特に、P は Q の対象として不適切であることを示す。
- b. 話者は、P において Q が起こることがあってはならないとみなしている。すなわち、「P+Q すべきでない」という評価が付される。

ここで、deontic モダリティの「すべきでない」という意味が付されるのは P+Q であり、その「すべきでない」という評価の根拠が P であることを踏まえると、P+Q が deontic モダリティの scope であり、P が focus であるといえる。ここで、(29)の各文の scope と focus を(32)にまとめる。

- (29) a. 指定校推薦には文武両道で人望も厚い佐藤が選ばれると思っていたのに、伊藤先生が、自分の部活動生だからという理由で山田**など**を推薦した。 (再掲(3a))
- b. 私の母は、先日熱心なセールスに押されてダイエットサプリメント**など**を新たに契約してしまったという。 (再掲(27a))
- c. 医者は無理をすれば再発するといったが、二年もすぎれば、いつのまにか元の木阿弥で、私はせつせと仕事をはじめ、また徹夜**など**するようになっていた。

[「新寂庵説法」 (再掲(27b))]

- (32) a. 「すべきでない」の scope : 伊藤先生が (指定校推薦に) 山田を推薦する
focus : 山田
- b. 「すべきでない」の scope : ダイエットサプリメントを (新たに) 契約する
focus : ダイエットサプリメント
- c. 「すべきでない」の scope : 徹夜をする
focus : 徹夜

focus と scope の関係を確認されたい。(32)を見ると、focus は scope の内部で項として働いていることが分かる。すなわち、scope の範囲は focus を項にとる動詞句全体であると定めることができる。この、focus が scope の動詞句の項の一部であることは、deontic 用法のナドの特徴であることを特筆しておく。

3.2. deontic 用法のナドの統語分析

deontic 用法のナドの統語分析をするために、前節で観察した構造や意味の特徴を基に語

彙項目の定義を試みる。deontic 用法のナドの構造と意味の特徴は次のようにまとめられる。

- (33) deontic 用法のナドの観察から明らかになった特徴
- a. ナドの前接部が focus となり、「すべきでない」という評価の根拠となる。
 - b. focus と、focus を項とする動詞句全体が scope となり、それに対して deontic モダリティ「すべきでない」が付される。

deontic 用法のナドの、Lexicon に登録される語彙項目を考察する。(33)を手掛かりにすると、意味表示において、最終的に次のような記述が得られればよいことになる。

- (34) a. deontic 用法のナドの focus の property
<非難対象, ナドの前接部の指標番号>
- b. deontic 用法のナドの scope の property
<すべきでない, focus を項にとる動詞句の指標番号>

(33a)より、focus を示す property の(34a)の attribute を「非難対象」とし、value にはナドの前接部の指標が入るようにしておく。また scope を示す property である(34b)について、(33b)より attribute を「すべきでない」とし、value には focus を項にとる動詞句の指標が入ることとする。この(34)を用いて、deontic 用法のナド文である(35)を例に、意味表示を考察する。

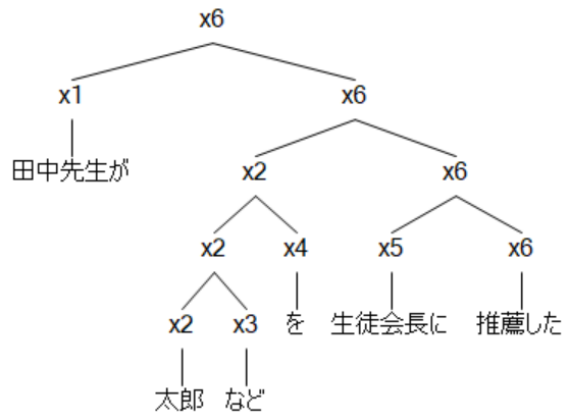
- (35) 田中先生が_{x1}、(嫌われ者の) 太郎_{x2} **など** _{x3} を_{x4} 生徒会長に_{x5} 推薦した_{x6}。

(34)を用いて(35)の意味表示を検討すると、(36)のようになる。

- (36) a. deontic 用法のナドの focus の property
<非難対象, x2>
- b. deontic 用法のナドの scope の property
<すべきでない, x6>

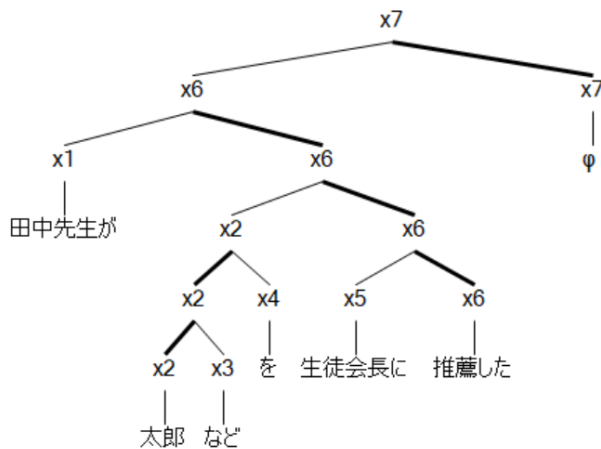
このような property を、どのように Lexicon に取り入れればよいか。(35)の構造を参考にするために、樹形図を示す。

(37) (35)の樹形図



(36b)の scope の property は、(37)においてナドの前接部を項として含んだ動詞句で、最上位にある指標 x6 を value に受け取りたいため、その x6 と Merge するものが scope の property を持てばよい。ここで x6 の最上位と Merge するものを x7 と置き、これを deontic モダリティの状態を表す object であるとする。

(38)



x7 は主要部として Merge したときに相手に deontic モダリティをもたらすことができるとする⁴。また、モダリティは通常文末表現によってもたらされることが多いため、x7 に音形はないものの、文末の位置に置いた。x7 は主要部として Merge するため、scope の property の value には★を採用する。deontic 用法のナドの focus は scope の内部にあるため、(36a)の

⁴ deontic モダリティを示す object を、初回の Merge の際に主要部でなければならないと仮定しない場合、deontic モダリティと Merge する動詞句は、とりうるすべての項との Merge が終わっていても deontic モダリティと Merge できることになる。そうすると動詞句には解釈不可能素性が残り、さらにナド句が deontic モダリティの focus に入れなくなる可能性がある。したがって、deontic モダリティを示す object は、少なくとも初回の Merge の際には主要部であると仮定しておく。

focus の property も x7 に持たせるとよい。しかし focus の value にはナドの前接部の指標 (x2) を取り込みたいが、x2 は x7 が実際に Merge する x6 よりも下位にある。したがって、x2 という指標が x6 の位置まで持ち上がるようにしなければならない。そこでナドの統語素性に target 素性 <target, ●>を持たせることにする。これは、ナド自身が非主要部として Merge した際の相手の指標が●に代入され、そのまま継承されていくものである。たとえば「太郎」と「など」が Merge したときには<target, x2>となり、これが x6 の統語素性まで持ち上げられる。この、x6 まで持ち上がって来た<target, x2>を x7 が受け取れるようにするために、x7 が持つ focus の property を<非難対象, ★_{target}>としておく。これは主要部として Merge したときに、相手が target 素性を持っていた場合、target 素性の指標を value にとるということである。したがって「<target, x2>という統語素性を持つ x6」と「<非難対象, ★_{target}>という property を持つ x7」について、x7 が主要部として Merge したとき、x7 の property は<非難対象, x2>になる⁵。以上より、deontic 用法のナドと deontic モダリティは次のように Lexicon に登録できることを提案する。

(39) a. Lexicon における deontic 用法のナドの語彙項目

[[Z, <target, ●>], φ, など]⁶

b. Lexicon における deontic 用法のナドと共起する deontic モダリティの語彙項目

[φ, <id, {<非難対象, ★_{target}>, <すべきでない, ★>}>, φ]⁷

(39)の Lexicon を実際に deontic ナド文(35)に適用すると、Numeration は(40)のようになる。

(35) 田中先生が_{x1}、(嫌われ者の) 太郎_{x2} **など**_{x3} を_{x4} 生徒会長に_{x5} 推薦した_{x6}。

(40) (35)の Numeration

<x1, [{N, ga}, <x1, {<Name, 田中先生>}>, 田中先生が]>

<x2, [{N}, <x2, {<Name, 太郎>}>, 太郎]>

<x3, [{Z, <target, ●>], φ, など]>

<x4, [{J, wo}, φ, を]>

<x5, [{N, ni}, <x5, {<生徒会長, T>}>, 生徒会長に]>

⁵ 実際に Merge する動きは、後述の(42)を参照。

⁶ さらに正確な記述をするためには、ナドがどのような要素に後接するか等を指定する統語素性が必要であるが、ここでは割愛する。またナドの範疇の定め方についても、ここでは特に関与しないため、範疇素性は便宜的に「Z」としておく。

⁷ 音形を持たない deontic モダリティを指す。また、本来ならば初回の Merge の際には主要部であることを規定する等の統語素性が必要であるが、ここでは割愛する。

<x6, [{V}, <x6, {<推薦する, T>, <Agent, ★_{ga}>, <Theme, ★_{wo}>, <Goal, ★_{ni}>, <Time, perfect>}>, 推薦した]>
 <x7, [φ, <x7, {<非難対象, ★_{target}>, <すべきでない, ★>}>, φ]>

以下、参考として(35)のナドの前接部 (x2) と deontic 用法のナド (x3) が Merge する過程を(41)に、動詞句 (x6) と deontic モダリティ (x7) が Merge する過程を(42)に示す。⁸

(41) 「太郎+など」の Merge
 <x2, [{N}, <x2, {<Name, 太郎>}>, 太郎]>
 <x3, [{Z, <target, ●>}, φ, など]>
 ⇒
 <x2, [{N, <target, x2>}, <x2, {<Name, 太郎>}>, <x2, [φ, φ, 太郎]>
 <x3, [{Z}, φ, など]>
 >]>

(41)では x3 「など」の統語素性にある<target, ●>の value に、Merge 相手であり主要部となる x2 の指標が入って<target, x2>となり、これが主要部である x2 の統語素性に継承されている。

(42) 「田中先生が太郎などを生徒会長に推薦した+φ (x7: deontic モダリティ)」の Merge
 <x6, [{V, <target, x2>}, <x6, {<推薦する, T>, <Agent, x1>, <Theme, x2>, <Goal, x5>, <Time, perfect>}>, <...略...>
 >]>
 <x7, [φ, <x7, {<非難対象, ★_{target}>, <すべきでない, ★>}>, φ]>
 ⇒
 <x7, [φ, <x7, {<非難対象, x2>, <すべきでない, x6>}>, <x6, [{V}, <x6, {<推薦する, T>, <Agent, x1>, <Theme, x2>, <Goal, x5>, <Time, perfect>}>, <...略...>
 >]>

⁸ (35)の派生の全過程は本章末に付録として収録している。

<x7,[φ, φ, φ]>
>]>

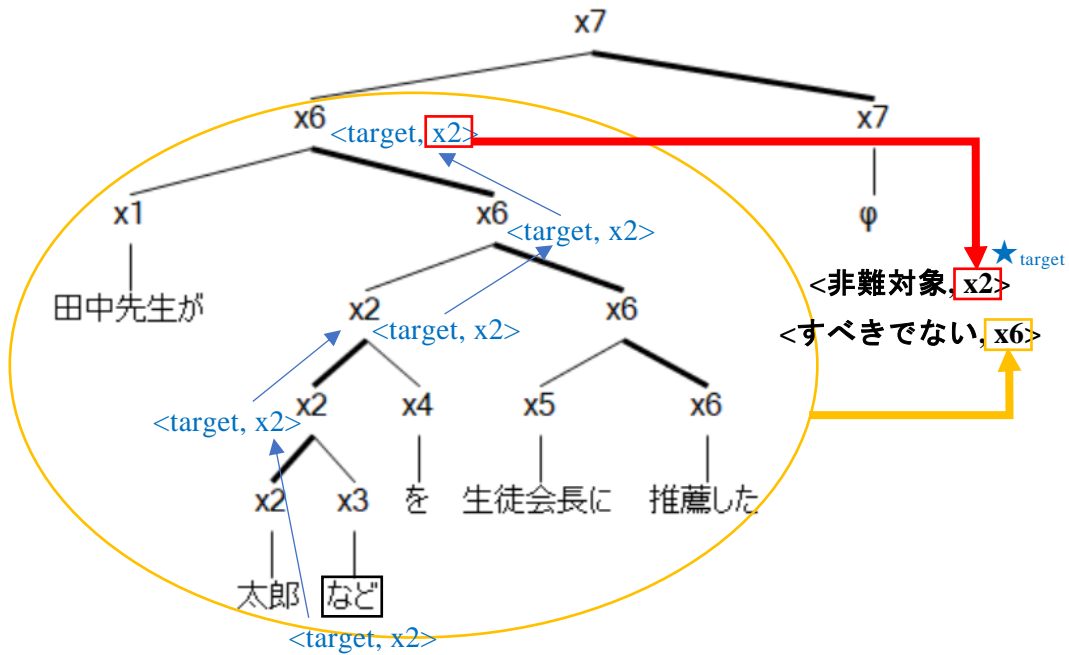
(42)において x7 は主要部として x6 と Merge するため、x7 の property<非難対象, ★_{target}>の value は、Merge 相手である x6 が持つ target 素性の指標 (x2) をとる。また、x7 の property<すべきでない, ★>の value は、Merge 相手の指標である x6 をとっている。

(40)の Numeration を派生した結果の意味表示と、その樹形図を示す。

- (43) Merge 後、整理した意味表示
 {<x1, {<Name, 田中先生>}>,
 <x2, {<Name, 太郎>}>,
 <x5, {<生徒会長, T>}>,
 <x6, {<推薦する, T>, <Agent, x1>, <Theme, x2>, <Goal, x5>, <Time, perfect>}>,
 <x7, {<非難対象, x2>, <すべきでない, x6>}>

(35)の意味を表示することができている。また、deontic 用法のナドと deontic モダリティの語彙項目は、他の deontic ナド文においても同様にうまく作用するため、Lexicon の登録形の作成は成功しているといえる。

- (44) deontic 用法のナド文の樹形図



deontic 用法のナドの派生を整理する。(44)に示される通り、deontic 用法のナドは deontic モダリティの状態を表す object (この場合は x7) と共起する。また、target 素性を持つことで、deontic ナドの前接部の指標を、動詞句のすべての Merge が終わるところまで持ち上げている。動詞句と deontic モダリティが Merge する際、動詞句全体が scope となり「すべきでない」という deontic モダリティがもたらされ、かつ動詞句が「すべきでない」と評価される根拠 (focus) は scope の内部にあり、ナドの前接部であるという構造をとる。また、ナド句は動詞句の項の一つとなっている。

3.3. (付録) deontic 用法のナドの派生

(45) 田中先生が x_1 、(嫌われ者の) 太郎 x_2 など x_3 を x_4 生徒会長に x_5 推薦した x_6 。

(46) 目指す意味表示

{<x1, {<Name, 田中先生>}>},
 <x2, {<Name, 太郎>}>,
 <x5, {<生徒会長, T>}>,
 <x6, {<推薦する, T>, <Agent, x1>, <Theme, x2>, <Goal, x5>, <Time, perfect>}>,
 <x7, {<非難対象, x2>, <すべきでない, x6>}>

(47) Numeration

<x1, [{N, ga}, <x1, {<Name, 田中先生>}>, 田中先生が]>
 <x2, [{N}, <x2, {<Name, 太郎>}>, 太郎]>
 <x3, [{Z, <target, ●>}, φ, など]>
 <x4, [{J, wo}, φ, を]>
 <x5, [{N, ni}, <x5, {<生徒会長, T>}>, 生徒会長に]>
 <x6, [{V}, <x6, {<推薦する, T>, <Agent, ★_{ga}>, <Theme, ★_{wo}>, <Goal, ★_{ni}>, <Time, perfect>}>, 推薦した]>
 <x7, [φ, <x7, {<非難対象, ★_{target}>, <すべきでない, ★>}>, φ]>

(48) 「太郎+など」の Merge

<x2, [{N}, <x2, {<Name, 太郎>}>, 太郎]>
 <x3, [{Z, <target, ●>}, φ, など]>
 ⇒
 <x2, [{N, <target, x2>}, <x2, {<Name, 太郎>}>, <
 <x2, [φ, φ, 太郎]>

<x3, [{Z}, φ, など]>
>]>

(49) 「太郎など+を」の Merge

<x2, [{N, <target, x2>}, <x2, {<Name, 太郎>}>, <
<x2, [φ, φ, 太郎]>
<x3, [{Z}, φ, など]>
>]>
<x4, [{J, wo}, φ, を]>
⇒
<x2, [{N, <target, x2>, wo}, <x2, {<Name, 太郎>}>, <
<x4, [{J}, φ, を]>
<x2, [φ, φ, <
<x2, [φ, φ, 太郎]>
<x3, [{Z}, φ, など]>
>]>
>]>

(50) 「生徒会長に+推薦した」の Merge

<x5, [{N, ni}, <x5, {<生徒会長, T>}>, 生徒会長に]>
<x6, [{V}, <x6, {<推薦する, T>, <Agent, ★_{ga}>, <Theme, ★_{wo}>, <Goal, ★_{ni}>, <Time, perfect>}>, 推薦した]>
⇒
<x6, [{V}, <x6, {<推薦する, T>, <Agent, ★_{ga}>, <Theme, ★_{wo}>, <Goal, x5>, <Time, perfect>}>, <
<x5, [{N}, <x5, {<生徒会長, T>}>, 生徒会長に]>
<x6, [φ, φ, 推薦した]>
>]>

(51) 「太郎などを+生徒会長に推薦した」の Merge

<x2, [{N, <target, x2>, wo}, <x2, {<Name, 太郎>}>, <
<x4, [{J}, φ, を]>
<x2, [φ, φ, <
<x2, [φ, φ, 太郎]>
<x3, [{Z}, φ, など]>

>]>
 >]>
 <x6, [{V}, <x6, {<推薦する, T>, <Agent, ★_{ga}>, <Theme, ★_{wo}>, <Goal, x5>, <Time, perfect>}>, <
 <x5, [{N}, <x5, {<生徒会長, T>}>, 生徒会長に]>
 <x6, [φ, φ, 推薦した]>
 >]>
 ⇒
 <x6, [{V, <target, x2>}, <x6, {<推薦する, T>, <Agent, ★_{ga}>, <Theme, x2>, <Goal, x5>, <Time, perfect>}>, <
 <x2, [{N}, <x2, {<Name, 太郎>}>, <
 <x4, [{J}, φ, を]>
 <x2, [φ, φ, <
 <x2, [φ, φ, 太郎]>
 <x3, [{Z}, φ, など]>
 >]>
 >]>
 <x6, [φ, φ, <
 <x5, [{N}, <x5, {<生徒会長, T>}>, 生徒会長に]>
 <x6, [φ, φ, 推薦した]>
 >]>
 >]>

(52) 「田中先生が+太郎などを生徒会長に推薦した」の Merge

<x1, [{N, ga}, <x1, {<Name, 田中先生>}>, 田中先生が]>
 <x6, [{V, <target, x2>}, <x6, {<推薦する, T>, <Agent, ★_{ga}>, <Theme, x2>, <Goal, x5>, <Time, perfect>}>, <
 <x2, [{N}, <x2, {<Name, 太郎>}>, <
 <x4, [{J}, φ, を]>
 <x2, [φ, φ, <
 <x2, [φ, φ, 太郎]>
 <x3, [{Z}, φ, など]>
 >]>
 >]>
 <x6, [φ, φ, <

<x5, [{N}, <x5, {<生徒会長, T>}>, 生徒会長に]>
 <x6, [φ, φ, 推薦した]>
 >]>
 >]>
 ⇒
 <x6, [{V, <target, x2>}, <x6, {<推薦する, T>, <Agent, x1>, <Theme, x2>, <Goal, x5>, <Time, perfect>}>, <
 <x1, [{N}, <x1, {<Name, 田中先生>}>, 田中先生が]>
 <x6, [φ, φ, <
 <x2, [{N}, <x2, {<Name, 太郎>}>, <
 <x4, [{J}, φ, を]>
 <x2, [φ, φ, <
 <x2, [φ, φ, 太郎]>
 <x3, [{Z}, φ, など]>
]>]>
]>]>
 <x6, [φ, φ, <
 <x5, [{N}, <x5, {<生徒会長, T>}>, 生徒会長に]>
 <x6, [φ, φ, 推薦した]>
]>]>
 >]>
 >]>

(53) 「田中先生が太郎などを生徒会長に推薦した+φ (x7: deontic モダリティ)」の Merge

<x6, [{V, <target, x2>}, <x6, {<推薦する, T>, <Agent, x1>, <Theme, x2>, <Goal, x5>, <Time, perfect>}>, <
 <x1, [{N}, <x1, {<Name, 田中先生>}>, 田中先生が]>
 <x6, [φ, φ, <
 <x2, [{N}, <x2, {<Name, 太郎>}>, <
 <x4, [{J}, φ, を]>
 <x2, [φ, φ, <
 <x2, [φ, φ, 太郎]>
 <x3, [{Z}, φ, など]>
]>]>
]>]>

>]>
 <x6, [φ, φ, <
 <x5, [{N}, <x5, {<生徒会長, T>}>, 生徒会長に]>
 <x6, [φ, φ, 推薦した]>
 >]>
 >]>
 >]>
 <x7, [φ, <x7, {<非難対象, ★_{target}>, <すべきでない, ★>}>, φ]>
 ⇒
 <x7, [φ, <x7, {<非難対象, x2>, <すべきでない, x6>}>, <
 <x6, [{V}, <x6, {<推薦する, T>, <Agent, x1>, <Theme, x2>, <Goal, x5>, <Time,
 perfect>}>, <
 <x1, [{N}, <x1, {<Name, 田中先生>}>, 田中先生が]>
 <x6, [φ, φ, <
 <x2, [{N}, <x2, {<Name, 太郎>}>, <
 <x4, [{J}, φ, を]>
 <x2, [φ, φ, <
 <x2, [φ, φ, 太郎]>
 <x3, [{Z}, φ, など]>
 >]>
 >]>
 >]>
 <x6, [φ, φ, <
 <x5, [{N}, <x5, {<生徒会長, T>}>, 生徒会長に]>
 <x6, [φ, φ, 推薦した]>
 >]>
 >]>
 >]>
 <x7, [φ, φ, φ]>
 >]>

(54) LF 意味素性

<x7, {<非難対象, x2>, <すべきでない, x6>}>
 <x6, {<推薦する, T>, <Agent, x1>, <Theme, x2>, <Goal, x5>, <Time, perfect>}>
 <x1, {<Name, 田中先生>}>
 <x2, {<Name, 太郎>}>

<x5, {<生徒会長, T}>>

(55)

整理後の意味表示

{<x1, {<Name, 田中先生>}>},

<x2, {<Name, 太郎>}>},

<x5, {<生徒会長, T}>}>},

<x6, {<推薦する, T>, <Agent, x1>, <Theme, x2>, <Goal, x5>, <Time, perfect>}>},

<x7, {<非難対象, x2>, <すべきでない, x6>}>}

4. epistemic 用法のナド構文

4.1. epistemic 用法のナドの観察

epistemic 用法のナドのもたらす意味や focus、scope を見ていく。deontic 用法のナドにおける意味考察の方針と同じく、まずは epistemic 用法のナドを用いた文と epistemic 用法のナドを除いた文を比較することで、epistemic 用法のナドが文にもたらす意味を推定する。

- (56) a. 二〇〇三年三月期ですら赤字なのに、金融庁の要求通り引き当て金を手当てして
いては、黒字決算**など**夢のまた夢である。 [「UFJ 消滅」(再掲(3b))]
b. エース社員が集められるという今回の重大プロジェクトに、鈴木**など**呼ばれな
かった。 (再掲(28a))
c. ちなみに富田さんは一九二三年生まれです。それに比べれば、私**など**まだまだ
若いのです。大いに山歩きを愉しみましょう。
[定年後は山歩きを愉しみなさい(再掲(28b))]

- (57) a. 二〇〇三年三月期ですら赤字なのに、金融庁の要求通り引き当て金を手当てして
いては、黒字決算は夢のまた夢である。 (再掲(4b))
b. エース社員が集められるという今回の重大プロジェクトに、鈴木は呼ばれな
かった。
c. ちなみに富田さんは一九二三年生まれです。それに比べれば、私はまだまだ若
いのです。大いに山歩きを愉しみましょう。

(56)の文から epistemic 用法のナドを除くと、(57)のようになる。なお、ナドを単に除くだけでは非文になるため、ナドを除いた箇所に助詞ハを補う⁹。epistemic 用法のナドを用いた(56)に「当たり前だ」という epistemic モダリティの意味が付されることは、既に確認した通りである。たとえば(56b)には、「(エース社員が集められるような重大プロジェクトに、仕事ができない) 鈴木は呼ばれないのが当たり前だ」という epistemic モダリティ的意味が付されていた。ここで、epistemic 用法のナドも、deontic 用法のナドと同様に軽視・謙遜のナドとしての役割を考える必要がある。(56b)では、「鈴木」が軽視・謙遜の対象となっている。では軽視・謙遜のナドの対象である「鈴木」が、「当たり前だ」という epistemic モダリティで果たす役割は何か。すると、「重大プロジェクトに呼ばれない」存在の最たる

⁹ ナドの位置に格助詞を補うと座りが悪い。

- (i) a. ?エース社員が集められるという今回の重大プロジェクトに、山田が呼ばれなかった。
b. ?*二〇〇三年三月期ですら赤字なのに、金融庁の要求通り引き当て金を手当てしては、
黒字決算が夢のまた夢である。
c. *ちなみに富田さんは一九二三年生まれです。それに比べれば、私がまだまだ若いので
す。大いに山歩きを愉しみましょう。

例の一つが「鈴木」であるという解釈が可能である。換言すると、「鈴木」は「重大プロジェクトと呼ばれない」最たる例の一つであるから、「鈴木は重大プロジェクトと呼ばれない」ことが当たり前であるという話者の判断が付されるということである。

ここで epistemic 用法のナドの前接部を X、ナドの後部を Y とすると、機能は次のようにまとめられる。¹⁰

(58) epistemic 用法のナドの意味的機能

epistemic 用法のナド文「X ナド Y」の場合、ナドを含まない文に対して以下の2つの意味が加わる。

- a. 話者にとって、X は軽視・謙遜の対象である。
- b. 話者は、X に対して Y という事象が起こる蓋然性が高いとみなしている。すなわち、「X は Y が当たり前だ」という判断が付される。

ナドの前接部である X は、Y が起こって当然の最たる例の一つであり、また「当たり前である」と判断される事象が Y であることから、X が epistemic モダリティの focus であり、Y が scope であるといえる。focus と scope の位置を明らかにするために、(56)の各文の focus と scope をまとめる。

- (56) a. 二〇〇三年三月期ですら赤字なのに、金融庁の要求通り引き当て金を手当てして
いては、黒字決算**など**夢のまた夢である。 [「UFJ 消滅」(再掲(3b))]
- b. エース社員が集められるという今回の重大プロジェクトに、鈴木**など**呼ばれな
かった。 (再掲(28a))
- c. ちなみに富田さんは一九二三年生まれです。それに比べれば、私**など**まだまだ
若いのです。大いに山歩きを愉しみましょう。
[定年後は山歩きを愉しみなさい(再掲(28b))]

- (59) a. focus : 黒字決算
scope : 夢のまた夢である
- b. focus : 鈴木
scope : 呼ばれなかった
- c. focus : 私
scope : まだまだ若い

¹⁰ deontic 用法のナドでは P、Q を用いたが、epistemic 用法のナドにおいて P、Q を用いずに X、Y を用いているのは、特に Q と Y が違うものを指すためである。

(59a, b, c)はそれぞれ(56a, b, c)に対応している。まず focus は、deontic 用法のナドと同様、いずれもナドの前接部が該当していることを確認しておく。また scope は、focus 部分を Subject とする Predicate が該当することが見受けられる。つまり epistemic モダリティの focus/scope は、Subject/Predicate の関係と並行的である。deontic 用法のナドでは focus 部分を項にとる動詞句が scope であると指摘したが、epistemic 用法のナドの focus が scope の項ではなく Subject になることは、Palmer (1986)が deontic モダリティは description を表す文に関するが epistemic モダリティは Predication を表す文に関する と指摘していることに合う。また epistemic 用法のナドの位置に格助詞ではなくハを補えることから分かりやすい。したがって epistemic 用法のナドにおいて、focus はナドの前接部であり、かつ文の Subject に値する部分である。一方 scope は、文の Predicate に値する部分が該当する。¹¹

epistemic 用法のナド文からナドを除くとき、元々ナドがあった位置にはハを補うことができた。epistemic 用法のナドはハと関係が深い。ここで、epistemic 用法のナド文とハの関連を見ておく。

基本的に、epistemic 用法のナドを付加できる文においてナドを除くと、ナドが付加されるべき位置にハを補えることが多い。しかしハが位置できない場合がある。特に、ナドが Subject となる動詞句等に入り、その動詞句にハが後接する場合は該当する。

- (60) クリシュから降りるとき、落下の衝撃で [怪我{φ/*は}して] は、笑い話にもならない。
 cf. クリシュから降りるとき、落下の衝撃で [怪我**など**して] は、笑い話にもならない。 [「湖岸の国の魔法戦士」]

(60)の文において Subject は「怪我をして」であり、この動詞句にはハが既に後接している。このようなとき、epistemic 用法のナドを除いた位置にハは付加できない。しかしナドを除く前の epistemic ナド文において、ナドはハで取り立てられる Subject 「怪我をする」の内側に存在しているため、ハがナドと同じ場所に位置できることと本質的に違わないと考える。そのほかナドに軽動詞が後続する(61)も、ナドが付加されるべき位置にはハが存在しない。

- (61) 花子は、部屋に籠り{*φ/*は}せず、学校に行くべきだ。
 cf. 花子は、部屋に籠り**など**せず、学校に行くべきだ。 [井戸 2017: 52, (35a)]

(61)のナドの位置に助詞を補わないと非文になるが、ハを入れても容認度が低く、他に適

¹¹ 英語の用語が多くなってしまったが、これは後に紹介する先行研究で用いられた用語と区別するためであり、ご容赦いただきたい。

当な助詞もない。以上より、epistemic 用法のナドであればナドを必ずハに置き換えられるということではなく、epistemic 用法のナドが既にハによって取り立てられている Subject 句内にある場合を除き、かつ epistemic 用法のナド文からナドを除いた文において、ナドの位置に助詞を補える場合において、それはハが該当するといえる。

また、ほとんどの epistemic 用法のナドは、ハを後接することができる。

(62) もちろん指定券などはとらない。駅に来て適当な列車を見つけて乗ればいいから
気楽だ。 [「イギリスは豊かなり」]

(62)は epistemic 用法のナドにハが後接している。(56)の各文にハを後接することも可能だ。

- (63) a. 二〇〇三年三月期ですら赤字なのに、金融庁の要求通り引き当て金を手当てして
いては、黒字決算などは夢のまた夢である。
b. エース社員が集められるという今回の重大プロジェクトに、鈴木などは呼ばれな
かった。
c. はあ。そういうもんですかねえ。わたしなどは、とてもそこまで分りません。

そのほか、ハの前に格助詞を付したものを後接することもできる。

(64) 彼は「キリスト教を受け入れれば、俗世の生活や活動のわずらわしさから逃避し
て、いくじのない、女々しい手合いになる」という観念を否定するため、ローズ
ヴェルト調に「道徳的戦いは厳しい人間をつくり、表面的平和は脆弱な人間をつ
くる」と断言した。さらに告白の場では、みずからの気質を要約して「罰をあた
えぬ神などには関心がない」と述べている。 [「アメリカの反知性主義」]

以上に挙げた例は、ナドにハが後接してもしなくてもよい文である。しかし epistemic 用法
のナドの中には、ハ以外で後接するものが定まっている例もある。

(65) ノックの音がした。この事務所、キューピッドの会へはいるのにノックなどする
者はひとりもない。 [「謀殺列島赤の殺人事件」]

(65)はナドの直後にハを付加できない。これは「する者」に予めハが後接しているためであ
る。ナドに必ずハが後接できないという点で、ハの有無を問わない(62)、(63)、(64)とは異
なるが、いずれにしてもナドはハの句の中に位置しているといえる。以上より epistemic 用
法のナドは、ハによって取り立てられた句に入ることができる。

4.2. epistemic 用法のナドの統語分析

Lexicon における epistemic 用法のナドの登録形を考えるために、まずは意味や構造の特徴を振り返る。まずは前節で観察された epistemic 用法のナドの特徴をまとめ、意味表示にあるべき property を考察する。

- (66) epistemic 用法のナドの観察から明らかになった特徴
- a. ナドの前接部が focus となり、「当たり前だ」と判断される事象が起こる最たる例となる。
 - b. Predicate にあたる部分が scope となり、それに対して epistemic モダリティ「当たり前だ」が付される。

(66)の特徴を手掛かりにすると、epistemic 用法のナド文の意味表示にあるべき property は次のように考えられる。

- (67) a. epistemic 用法のナドの focus の property
<注目, ナドの前接部の指標番号>
- b. epistemic 用法のナドの scope の property
<当たり前だ, Predicate の指標番号>

(66a)より、epistemic 用法のナドの focus を示す property である(67a)は attribute を「注目」とし、その value にはナドの前接部の語の指標を入れたい。また(66b)より、ナドの scope を示す property の(67b)は attribute を「当たり前だ」とし、value には述部の指標番号が入ることとする。これらの property は、epistemic 用法のナドと共起する epistemic モダリティが持っているとする。たとえばこの(67)を epistemic 用法のナド文である(68)に適用すると、(69)のようになる。

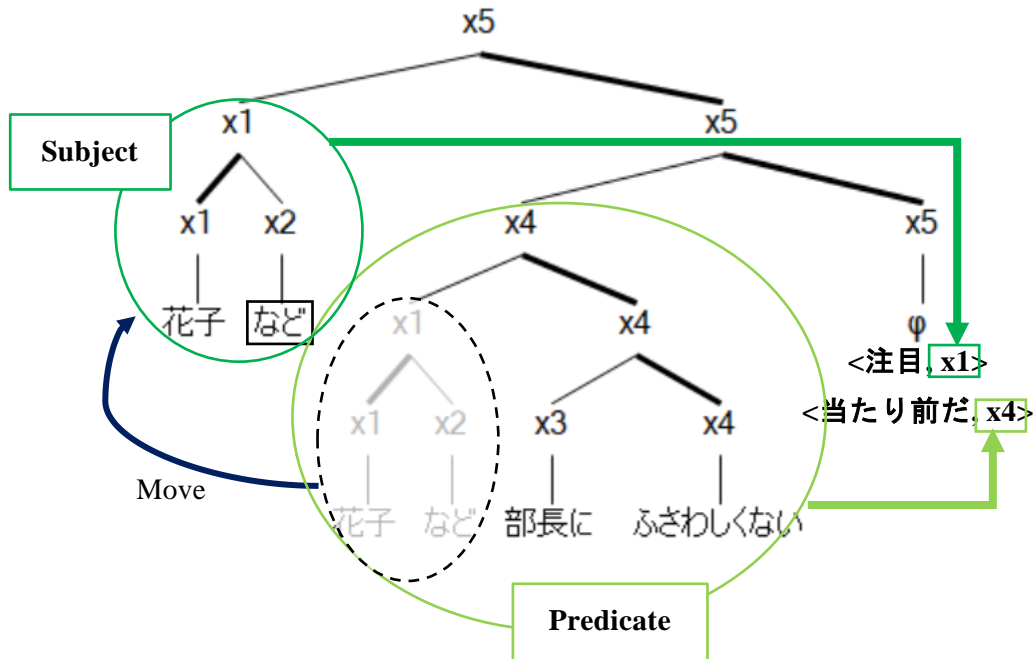
(68) (責任感のない) 花子 _{x1} **など** _{x2} 部長に _{x3} ふさわしくない _{x4}。

- (69) a. epistemic 用法のナドの focus の property
<注目, x1>
- b. epistemic 用法のナドの scope の property
<当たり前だ, x4>

(69)が意味表示に現れることができるよう、Lexicon における登録形を考察していく。ここ

で、epistemic ナド文では Subject が focus、Predicate が scope になるという特性があった。epistemic ナド文(68)を樹形図に示すと、(70)の通りである。

(70)



なお x5 は、音形を持たない epistemic モダリティを示す object である。Subject に該当するナド句に注目すると、Predicate の外部にある。epistemic モダリティ (x5) は、まず Predicate (x4) と Merge して attribute 「あたり前だ」の value に Predicate の指標である x4 を取り込み、次に Subject (x1) と Merge して attribute 「注目」の value に Subject の指標である x1 を取り込まなければならない¹²。しかし、ナド句「花子など」は、「部長にふさわしくない」の Theme でもあるため、ナド句は点線円の位置であらかじめ x4 と Merge し、x4 の Theme として指標が取り込まれておく必要がある。したがって、ナド句が epistemic モダリティと Merge するためには、点線円の位置から Subject の位置まで移動する必要がある。このように epistemic 用法のナド句は移動が必要になる点や(67)で提案した property、そして epistemic ナド文の Subject 部分が focus、Predicate 部分が scope にあたることなどを踏まえると、Lexicon での登録形を(71)の通りに定められる。

(71) a. Lexicon における epistemic 用法のナドの語彙項目

¹² epistemic モダリティを示す object は、Subject と Predicate のそれぞれと Merge しなければならない二項述語であり、両方と Merge するためには、少なくとも初め2回の Merge において主要部である必要がある。

[[Z, nado}, ϕ , など]¹³

- b. Lexicon における epistemic 用法のナドと共起する epistemic モダリティの語彙項目
[ϕ , <id, {<Subject, ★_{nado}>, <注目, ★_{nado}>, <Predicate, ★>, <当たり前だ, ★>}>, ϕ]¹⁴

(71)に用いている「nado」は、本論文で新たに提案する解釈不可能素性である。定義は次に示す通りである。

(72) nado

継承規定 Merge によって、初回のみ非主要部から継承され、結果的に「X ナド」全体が nado という素性を持つことになる。

削除規定 Merge 相手の★_{nado}を置き換えた際に削除される。

nado は初回のみ非主要部から継承されるため、ナド句として nado 素性を持ったあとは、継承されることがない。ナド句としての初回の Merge 相手はナド句を項にとる動詞句であるが、★_{nado}を持っていることはなく¹⁵、そのままではナド句の nado 素性は埋もれてしまうため、この解釈不可能素性 nado を削除するためには移動をするしかなくなる。このようにして、nado はナド句が必ず移動することを規定できている。また、(71b)のうちナド句の指標が入るべき property である<Subject, ★_{nado}>と<注目, ★_{nado}>は、value を「★_{nado}」と指定することで、ナド句が Subject になり、かつ focus になることを規定できている。

参考として、実際に epistemic 用法のナド文(68)に(71)の Lexicon での登録形を適用してみる。(68)の Numeration を(73)に記し、さらに epistemic 用法のナドに特異的な部分 (Subject とナドの Merge、Predicate と epistemic モダリティの Merge、Subject の Landing) の派生を示す。¹⁶

(68) (責任感のない) 花子_{x1} **など** _{x2} 部長に _{x3} ふさわしくない _{x4}。

¹³ ナドは Merge する際、常に非主要部となると仮定している。本来はこのような規定を統語素性として加えるべきであるが、deontic 用法のナドと同様、本論文では割愛している。ナドの範疇の定め方についてもここでは特に関与しないため、範疇素性は便宜的に「Z」としておく。

¹⁴ 音形を持たない epistemic モダリティを指す。また、本来ならば初め2回の Merge の際には主要部であることを規定する等の統語素性が必要であるが、ここでは割愛する。

¹⁵ 現在、★_{nado} は、epistemic 用法のナドと共起する epistemic モダリティのみが持つと仮定している。

¹⁶ (68)の派生の全過程は本章末に付録として収録している。

(73) (68)の Numeration¹⁷

<x1, [{N}, <x1, {<Name, 花子>}], 花子]>
<x2, [{Z, nado, ga}, φ, など]>
<x3, [{N, ni}, <x3, {<Kind, 部長>}], 部長に]>
<x4, [{iA}, <x4, {<ふさわしくない, T>, <Theme, ★_{ga}>, <Goal, ★_{ni}>, <Time, imperfect>}], ふさわしくない]>
<x5, [φ, <x5, {<Subject, ★_{nado}>, <注目, ★_{nado}>, <Predicate, ★>, <当たり前だ, ★>}], φ]>

(74) 「花子+など」の Merge

<x1, [{N}, <x1, {<Name, 花子>}], 花子]>
<x2, [{Z, nado, ga}, φ, など]>
⇒
<x1, [{N, nado, ga}, <x1, {<Name, 花子>}], <
 <x1, [φ, φ, 花子]>
 <x2, [{Z}, φ, など]>
>]>

(74)では x2 「など」が持っていた nado が、主要部である x1 「花子」に継承されている。nado は初回の Merge でしか継承されないため、★_{nado} を持つ要素と Merge するまで、x1 が nado を持ち続けることになる。

(75) 「花子など部長にふさわしくない+φ (x5 : epistemic モダリティ)」の Merge

<x4, [{iA,
 <x1, [{N, nado}, <x1, {<Name, 花子>}], <
 <...略...>
 >}], <x4, {<ふさわしくない, T>, <Theme, x1>, <Goal, x3>, <Time, imperfect>}], <
 <...略...>
>]>
<x5, [φ, <x5, {<Subject, ★_{nado}>, <注目, ★_{nado}>, <Predicate, ★>, <当たり前だ, ★>}], φ]>
⇒
<x5, [{<x1, [{N, nado}, <x1, {<Name, 花子>}], <

¹⁷ x2 「など」について、ナド句「花子など」が x4 「ふさわしくない」の Theme として Merge するためには x2 「など」が統語素性に ga を持つ必要があるため、補っている。

<...略...>
 >]>, <x5, {<Subject, ★_{nado}>, <注目, ★_{nado}>, <Predicate, x4>, <当たり前だ, x4>}>, <
 <x4, [{iA}, <x4, {<ふさわしくない, T>, <Theme, x1>, <Goal, x3>, <Time,
 imperfect>}>, <
 <...略...>
 >]>
 <x5, [φ, φ, φ]>
 >]>

(75)は Predicate (x4) と epistemic モダリティ (x5) の Merge である。x5 の property のうち、Predicate に関連する property である <Predicate, ★> と <当たり前だ, ★> の value に Predicate の指標 x4 が代入されている。

(76) 「花子など」の Landing

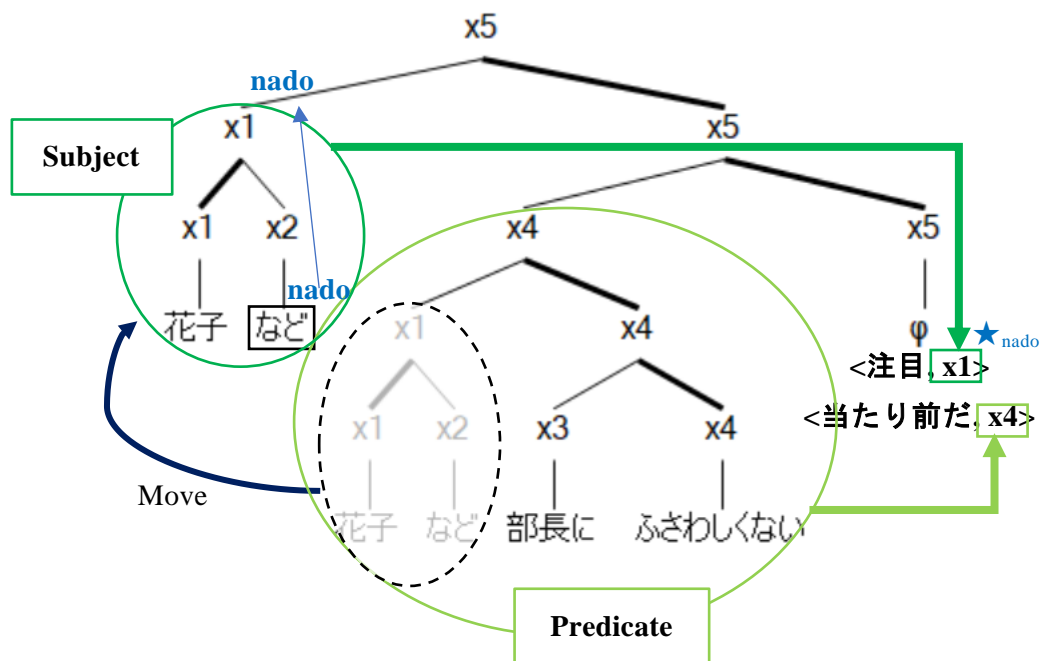
<x5, [{<x1, [{N, nado}, <x1, {<Name, 花子>}>], <
 <...略...>
 >]>], <x5, {<Subject, ★_{nado}>, <注目, ★_{nado}>, <Predicate, x4>, <当たり前だ, x4>}>, <
 <x4, [{iA}, <x4, {<ふさわしくない, T>, <Theme, x1>, <Goal, x3>, <Time,
 imperfect>}>, <
 <...略...>
 >]>
 <x5, [φ, φ, φ]>
 >]>
 ⇒
 <x5, [φ, <x5, {<Subject, x1>, <注目, x1>, <Predicate, x4>, <当たり前だ, x4>}>], <
 <x1, [{N}, <x1, {<Name, 花子>}>], <
 <...略...>
 >]>
 <x5, [φ, φ, <
 <x4, [{iA}, <x4, {<ふさわしくない, T>, <Theme, x1>, <Goal, x3>, <Time,
 imperfect>}>, <
 <...略...>
 >]>
 <x5, [φ, φ, φ]>
 >]>

(76)は予め Pickup していた Subject の「花子など」(x1)を Landing している¹⁸。Landing した x1 は解釈不可能素性 nado を持っているため、x5 が持つ Subject に関連する property <Subject, ★_{nado}>と<注目, ★_{nado}>の value に、nado を持つ x1 の指標が入る。

(77) Merge 後、整理した意味表示
 {<x1, {<Name, 花子>}>},
 <x3, {<Kind, 部長>}>,
 <x4, {<ふさわしくない, T>, <Theme, x1>, <Goal, x3>, <Time, imperfect>}>,
 <x5, {<Subject, x1>, <注目, x1>, <Predicate, x4>, <当たり前だ, x4>}>

(77)では(68)の意味表示ができています。なお、epistemic ナド文の他の例においても、本論文で提案した epistemic 用法のナドと epistemic モダリティの Lexicon での登録形はうまく作用しており、分析は成功したといえる。

(78) epistemic 用法のナド文の樹形図



最後に、(78)より epistemic 用法のナド文の構造を確認しておく。epistemic 用法のナドは Subject/Predicate の関係を表す文に現れ、epistemic モダリティの状態を表す object (この

¹⁸Subject「花子など」が移動を必要とすることは、既に見た通りである。この Subject「花子など」は、Predicate の項として Merge した後のタイミングであらかじめ Pickup の操作が行われている。そして(76)で、Predicate と並列する位置に Landing する。

場合は x5) と共起することで epistemic モダリティをもたらす。この focus はナドの前接部である Subject をとり、scope は文の Predicate をとる。なお focus にあたる Subject は、「当たり前だ」と判断される事象が起こる最たる例であることも示される。

4.3. (付録) epistemic 用法のナドの派生

(79) (責任感のない) 花子 x_1 **など** x_2 部長に x_3 ふさわしくない x_4 。

(80) 目指す意味表示

{<x1, {<Name, 花子>}>},
 <x3, {<Kind, 部長>}>,
 <x4, {<ふさわしくない, T>, <Theme, x1>, <Goal, x3>, <Time, imperfect>}>,
 <x5, {<Subject, x1>, <注目, x1>, <Predicate, x4>, <当たり前だ, x4>}>

(81) Numeration

<x1, [{N}, <x1, {<Name, 花子>}>, 花子]>
 <x2, [{Z, nado, ga}, ϕ , など]>
 <x3, [{N, ni}, <x3, {<Kind, 部長>}>, 部長に]>
 <x4, [{iA}, <x4, {<ふさわしくない, T>, <Theme, ★_{ga}>, <Goal, ★_{ni}>, <Time, imperfect>}>, ふさわしくない]>
 <x5, [ϕ , <x5, {<Subject, ★_{nado}>, <注目, ★_{nado}>, <Predicate, ★>, <当たり前だ, ★>}>, ϕ]>

(82) 「花子+など」の Merge

<x1, [{N}, <x1, {<Name, 花子>}>, 花子]>
 <x2, [{Z, nado, ga}, ϕ , など]>
 ⇒
 <x1, [{N, nado, ga}, <x1, {<Name, 花子>}>], <
 <x1, [ϕ , ϕ , 花子]>
 <x2, [{Z}, ϕ , など]>
 >]>

(83) 「部長に+ふさわしくない」の Merge

<x3, [{N, ni}, <x3, {<Kind, 部長>}>, 部長に]>
 <x4, [{iA}, <x4, {<ふさわしくない, T>, <Theme, ★_{ga}>, <Goal, ★_{ni}>, <Time,

imperfect>}>, ふさわしくない]>

⇒

<x4, [{iA}, <x4, {<ふさわしくない, T>, <Theme, ★_{ga}>, <Goal, x3>, <Time, imperfect>}>, <

<x3, [{N}, <x3, {<Kind, 部長>}>, 部長に]>

<x4, [φ, φ, ふさわしくない]>

>]>

(84) 「花子など+部長にふさわしくない」の Merge

<x1, [{N, nado, ga}, <x1, {<Name, 花子>}>, <

<x1, [φ, φ, 花子]>

<x2, [{Z}, φ, など]>

>]>

<x4, [{iA}, <x4, {<ふさわしくない, T>, <Theme, ★_{ga}>, <Goal, x3>, <Time, imperfect>}>, <

<x3, [{N}, <x3, {<Kind, 部長>}>, 部長に]>

<x4, [φ, φ, ふさわしくない]>

>]>

⇒

<x4, [{iA}, <x4, {<ふさわしくない, T>, <Theme, x1>, <Goal, x3>, <Time, imperfect>}>, <

<x1, [{N, nado}, <x1, {<Name, 花子>}>, <

<x1, [φ, φ, 花子]>

<x2, [{Z}, φ, など]>

>]>

<x4, [φ, φ, <

<x3, [{N}, <x3, {<Kind, 部長>}>, 部長に]>

<x4, [φ, φ, ふさわしくない]>

>]>

>]>

(85) 「花子など」の Pickup

<x4, [{iA}, <x4, {<ふさわしくない, T>, <Theme, x1>, <Goal, x3>, <Time, imperfect>}>, <

<x1, [{N, nado}, <x1, {<Name, 花子>}>, <

<x1, [φ, φ, 花子]>
 <x2, [{Z}, φ, など]>
 >]>
 <x4, [φ, φ, <
 <x3, [{N}, <x3, {<Kind, 部長>}>, 部長に]>
 <x4, [φ, φ, ふさわしくない]>
 >]>
 >]>
 ⇒
 <x4, [{iA,
 <x1, [{N, nado}, <x1, {<Name, 花子>}>, <
 <x1, [φ, φ, 花子]>
 <x2, [{Z}, φ, など]>
 >]>}, <x4, {<ふさわしくない, T>, <Theme, x1>, <Goal, x3>, <Time, imperfect>}>, <
 <
 <x4, [φ, φ, <
 <x3, [{N}, <x3, {<Kind, 部長>}>, 部長に]>
 <x4, [φ, φ, ふさわしくない]>
 >]>
 >]>

(86) 「(花子など) 部長にふさわしくない+φ (x5 : epistemic モダリティ)」の

Merge

<x4, [{iA,
 <x1, [{N, nado}, <x1, {<Name, 花子>}>, <
 <x1, [φ, φ, 花子]>
 <x2, [{Z}, φ, など]>
 >]>}, <x4, {<ふさわしくない, T>, <Theme, x1>, <Goal, x3>, <Time, imperfect>}>, <
 <
 <x4, [φ, φ, <
 <x3, [{N}, <x3, {<Kind, 部長>}>, 部長に]>
 <x4, [φ, φ, ふさわしくない]>
 >]>
 >]>
 <x5, [φ, <x5, {<Subject, ★_{nado}>, <注目, ★_{nado}>, <Predicate, ★>, <当たり前だ, ★

>]>, φ]>
 ⇒
 <x5, [{<x1, [{N, nado}, <x1, {<Name, 花子>}>, <
 <x1, [φ, φ, 花子]>
 <x2, [{Z}, φ, など]>
 >]}], <x5, {<Subject, ★_{nado}>, <注目, ★_{nado}>, <Predicate, x4>, <当たり前だ, x4>}>, <
 <x4, [{iA}, <x4, {<ふさわしくない, T>, <Theme, x1>, <Goal, x3>, <Time,
 imperfect>}>, <
 <>
 <x4, [φ, φ, <
 <x3, [{N}, <x3, {<Kind, 部長>}>, 部長に]>
 <x4, [φ, φ, ふさわしくない]>
]>
 >]>
 <x5, [φ, φ, φ]>
 >]>

(87) 「花子など」の Landing

<x5, [{<x1, [{N, nado}, <x1, {<Name, 花子>}>, <
 <x1, [φ, φ, 花子]>
 <x2, [{Z}, φ, など]>
 >]}], <x5, {<Subject, ★_{nado}>, <注目, ★_{nado}>, <Predicate, x4>, <当たり前だ, x4>}>, <
 <x4, [{iA}, <x4, {<ふさわしくない, T>, <Theme, x1>, <Goal, x3>, <Time,
 imperfect>}>, <
 <>
 <x4, [φ, φ, <
 <x3, [{N}, <x3, {<Kind, 部長>}>, 部長に]>
 <x4, [φ, φ, ふさわしくない]>
]>
 >]>
 <x5, [φ, φ, φ]>
 >]>
 ⇒
 <x5, [φ, <x5, {<Subject, x1>, <注目, x1>, <Predicate, x4>, <当たり前だ, x4>}>, <
 <x1, [{N}, <x1, {<Name, 花子>}>, <


```

    <x1, [φ, φ, 花子]>
    <x2, [{Z}, φ, など]>
  >]
  <x5, [φ, φ, <
    <x4, [{iA}, <x4, {<ふさわしくない, T>, <Theme, x1>, <Goal, x3>, <Time,
imperfect>}>, <
    <>
    <x4, [φ, φ, <
      <x3, [{N}, <x3, {<Kind, 部長>}>, 部長に]>
      <x4, [φ, φ, ふさわしくない]>
    >]
  >]
  <x5, [φ, φ, φ]>
>]

```

(88) LF 意味素性

```

<x5, {<Subject, x1>, <注目, x1>, <Predicate, x4>, <当たり前だ, x4>}>
<x1, {<Name, 花子>}>
<x4, {<ふさわしくない, T>, <Theme, x1>, <Goal, x3>, <Time, imperfect>}>
<x3, {<Kind, 部長>}>

```

(89) 整理後の意味表示

```

{<x1, {<Name, 花子>}>,
<x3, {<Kind, 部長>}>,
<x4, {<ふさわしくない, T>, <Theme, x1>, <Goal, x3>, <Time, imperfect>}>,
<x5, {<Subject, x1>, <注目, x1>, <Predicate, x4>, <当たり前だ, x4>}>}

```

5. deontic 用法のナドと epistemic 用法のナド

5.1. 本論文の主張のまとめ

本節ではナドの2用法の考察を一度整理する。これまで個別的看着てきた deontic 用法のナドと epistemic 用法のナドの特徴を押さえた上で、次節以降で示すナドの先行研究と本論文の主張の比較を見てもらいたい。

ここまで、軽視・謙遜のナドは deontic モダリティと共起するものと epistemic モダリティと共起するものとの二分できることを示してきた¹⁹。考察の結果をまとめると、次のようになる。

- (90) a. deontic ナド自体が deontic モダリティ的意味を持つのではなく、deontic モダリティと共起することで「すべきでない」という当為に関する意味がもたらされる。
b. deontic 用法のナドは項に後続することが観察されるが、これは deontic モダリティが description を表す文に関連するためである。
- (91) a. epistemic ナド自体が epistemic モダリティ的意味を持つのではなく、epistemic モダリティと共起することで「当たり前だ」という蓋然性の高さを示す意味がもたらされる。
b. epistemic 用法のナドは Subject に後続することが観察されるが、これは epistemic モダリティが Predication を表す文に関連するためである。

また、3章と4章で見た deontic 用法のナドと epistemic 用法のナドの特徴を再掲し、比較しておく。まず各ナドが持つ意味的職能は(31)と(58)の通りであった。

- (31) deontic 用法のナドの意味的職能
deontic 用法のナド文「P ナド Q」の場合、ナドを含まない文に対して以下の2つの意味が加わる。

¹⁹ しかし deontic 用法のナド、epistemic 用法のナドの二分が難しい例もある。

(i) はた目には、Jさんは、何不自由なく育ち、嫁ぎ、幸福な結婚生活を送ってきたように見えましたが、Jさん自身、愚痴**など**言っでは申し訳ないほどありがたい人生だと思いつてきたのだそうです。 [老人病院]

この場合、「愚痴など言っでは切り取るか、「愚痴など言っでは申し訳ないほどありがたい人生だと思いつてきた」を切り取るかでナドの判定が変わる。「愚痴など言っでは」と、「愚痴を言うべきでない」と deontic モダリティがあるが、「愚痴など言っでは申し訳ないほどありがたい人生だと思いつてきた」で切り取ると、「(幸福な人生を送ってきたのだから) 愚痴を言っでは申し訳ないほどありがたい人生だと思いつてきたのは当たり前だ」という epistemic モダリティの解釈ができる。このようにナドの作用域の候補が複数ある場合にはナドの判定が難しく、明らかにできていないため、今後更なる考察が必要である。

- a. 話者にとって、P は軽視・謙遜の対象である。特に、P は Q の対象として不適切であることを示す。
- b. 話者は、P において Q が起こることがあってはならないとみなしている。すなわち、「P+Q すべきでない」という評価が付される。

(58) epistemic 用法のナドの意味的職能

epistemic 用法のナド文「X ナド Y」の場合、ナドを含まない文に対して以下の2つの意味が加わる。

- a. 話者にとって、X は軽視・謙遜の対象である。
- b. 話者は、X に対して Y という事象が起こる蓋然性が高いとみなしている。すなわち、「X は Y が当たり前だ」という判断が付される。

そのほか、focus と scope の関係は、ナドの各種について次の通りである。

- (92) a. deontic 用法のナドは、focus がナドの前接部であり、scope は focus を項とする動詞句である。
- b. epistemic 用法のナドは、focus がナドの前接部であり、scope は focus を Subject とする Predicate である。

最後に各ナドの Lexicon における登録形と樹形図を示す。

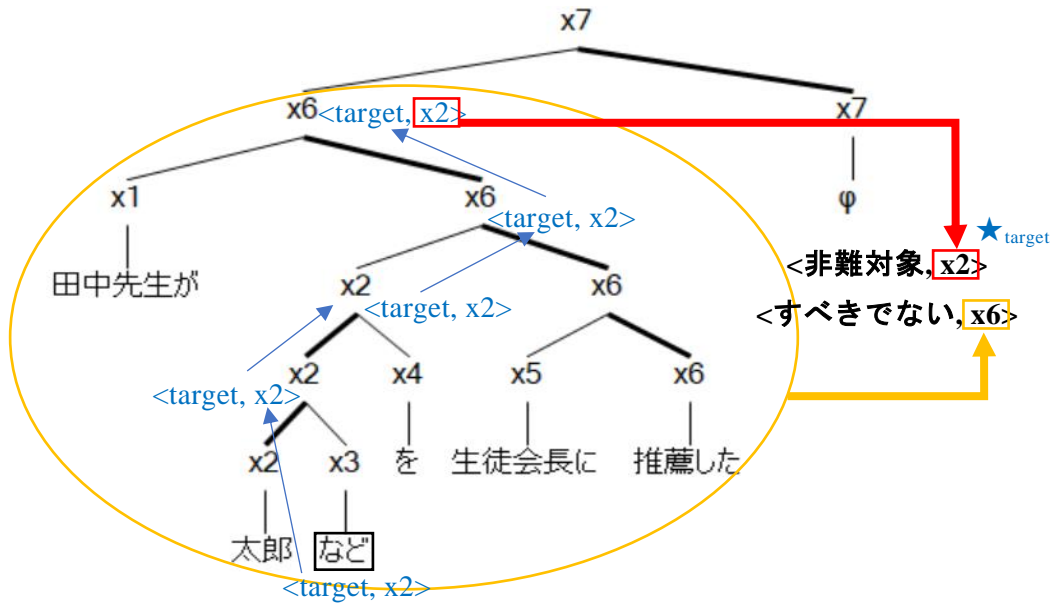
(39) a. Lexicon における deontic 用法のナドの語彙項目

[[Z, <target, ●>], φ, など]

b. Lexicon における deontic 用法のナドと共起する deontic モダリティの語彙項目

[φ, <id, {<非難対象, ★_{target}>, <すべきでない, ★>}>, φ]

(44) deontic 用法のナド文の樹形図



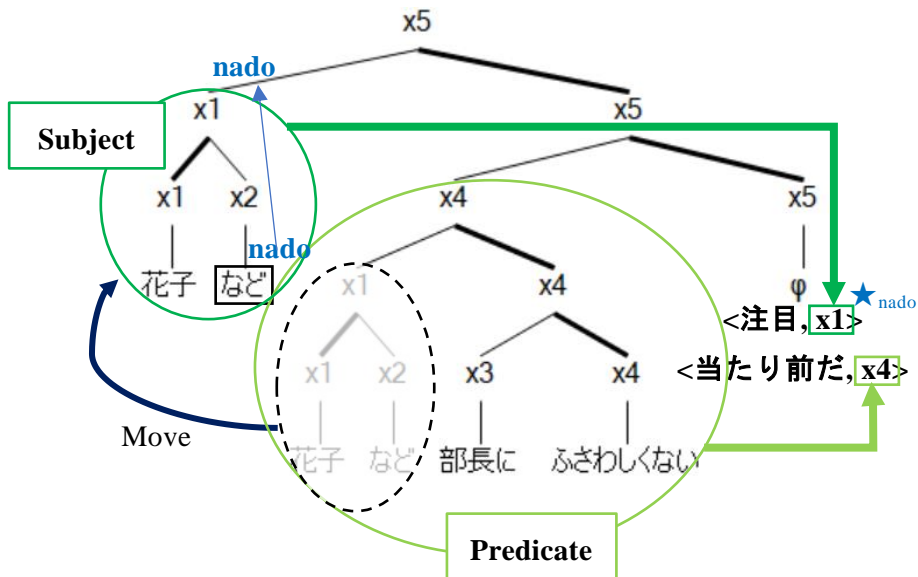
(71) a. Lexicon における epistemic 用法のナドの語彙項目

[[Z, nado], φ, など]

b. Lexicon における epistemic 用法のナドと共起する epistemic モダリティの語彙項目

[φ, <id, {<Subject, ★_{nado}>, <注目, ★_{nado}>, <Predicate, ★>, <当たり前だ, ★>>, φ]

(78) epistemic 用法のナド文の樹形図



本論文は軽視・謙遜のナドの意味的側面に着目して分類を始めたが、deontic モダリティと epistemic モダリティがそれぞれ description、Predication を表す文に関連するという特性

から、軽視・謙遜のナドの各種には構造的な違いがあることも明らかにできた。

5.2. 井戸(2013, 2014, 2017, 2018)との比較

井戸(2013, 2014, 2017, 2018)は、否定的な評価を表すナドを本論文とは異なる方法で2つの用法に分類している。しかし分類には問題点もあり、その点を指摘する。一方で井戸(2017)等はナドの2用法の振る舞いの違いもいくつか指摘しているのだが、それらの指摘は deontic 用法のナド、epistemic 用法のナドにも通じている。そこで井戸(2017)等の指摘を紹介し、かつ指摘された現象を deontic モダリティと epistemic モダリティの観点から説明することで、本論文の主張の妥当性を示したい。なお、井戸(2013)等で用いられている「否定的な評価を表すナド」は本論文における「軽視・謙遜のナド」と一致しているため、以降は軽視・謙遜のナドという呼称に統一する。

まずは井戸の一連の研究における軽視・謙遜のナドの分類方針を紹介する。井戸(2013)は、述部の肯否に注目してナドを2つに分けている。

- (93) a. (よりにもよって、) 警察**など**が学校にやって来た。 [井戸 2013: 69, (1)]
b. 警察**など**学校にやって来ない／来るものではない。 [井戸 2013: 69, (2)]

井戸(2013)では、(93ab)はどちらも「警察は学校にやって来るものではない」という話者の評価を示すとした上で、(93a)は肯定述部と共起し、(93b)は否定述部や否定的な評価のモダリティと共起するという違いがあると指摘している。つまり(93a)のナドは述部と肯否が逆転する評価を、(93b)のナドは述部そのままの評価を警察に与えているとし、それぞれをナド A、ナド B と名付けている。

- (94) a. ナド A
述部とは肯否が逆転する評価を表すナド [井戸 2013: 70]
b. ナド B
否定辞や否定的評価のモダリティがそのまま評価を明示するナド [井戸 2013: 70]

(94)における井戸(2013)が意図する「評価」とは否定的評価のことである²⁰から、A 用法は述部が肯定的である必要があり、B 用法は述部が否定的である必要がある。このように肯定的述部と共起するナドと否定的述部と共起するナドとを区別している点が特徴的である。しかし井戸(2013)の中で、B 用法のナドは否定辞または否定的評価のモダリティを必要とすると定めたことは正確でないという指摘も脚注でなされている。その理由は(95)に示さ

²⁰ 井戸(2013)は否定的な評価を表すナドを対象に論じているため、ナドによって示される評価は必ず否定的評価ということになる。

れる。

- (95) a. 太郎は、身体に悪いと思っていながら、**煙草など** {を／*φ} 止められなかった。
[井戸 2013: 70, (i)]
- b. 太郎は、身体に悪いと分かっているのだから、**煙草など** {*を／φ} すぐ止めるべきだ。
[井戸 2013: 70, (ii)]

(95)について述部の肯否に注目すると、(95a)は述部「止められなかった」が否定辞を持つためナド B に、(95b)は述部「止めるべきだ」が否定的評価を持たないためナド A に分類されるはずである。しかし井戸(2013)は、(95)の文はどちらも「煙草は止めるべきものだ」という「煙草」に対する評価があるとした上で、(95a)は「煙草」に下された評価が述部「止められなかった」と肯否が逆転していることからナド A、(95b)はかつ「煙草」に対する評価と述部「止めるべきだ」の肯否が一致していることからナド B になるはずだとしている。また、詳細は 5.6 節で述べるが井戸(2013)はナド A に格助詞が後接し、ナド B に格助詞が後接しないという特徴を指摘しており、この特徴も援用して(95a)には格助詞が後接することからナド A、(95b)はナドに格助詞が後接しないことからナド B であると、(95a)がナド A、(95b)がナド B であるという判定を補強している。このように、ナド文の述部の肯否で分類をすると矛盾が生じる場合があるということである。この状況を、井戸(2013: 70)は「このことから、ナド A、B の特徴には本来否定辞の有無は関係なく、話者が意味的に「否定的な評価」をもって発話すれば容認可能なことが分かる。しかし、ナド B の実際の用例はほとんどが否定辞と共起すること、話者によって異なりうる語用論的な否定的評価の読みを排除することの二点のため、ナド B を否定辞と共起するものに限って論を進めていく。」としている。これを踏まえ、筆者がナド B についてより正確な記述を試みると、「話者が意味的に「否定的な評価」をもって発話するかどうか」になると考えられる。しかし、そもそも「否定的」という尺度は曖昧である。

- (96) ベテラン社員が多かった先日の会議では、入社一年目の花子の発言**など**聞き流された。

(96)は格助詞が後接できないため、井戸(2013)が指摘した格助詞の後接の特徴に基づくと、B 用法のナドにあたる。したがって(94b)より否定辞や否定的モダリティがあるはずであるが、「聞き流された」という述部から否定的評価を感じるかどうかは意見が分かれるだろう。(96)のように、否定辞を持たず、述部が否定的な評価を持つかどうか分りにくい文は

数多く存在する²¹。井戸(2013)では否定辞に限定するということであるが、やはり、より汎用的な基準を導入したいところである。したがって述部における「否定的評価」という項目は、ナドを二分する定義に用いるには不十分だと考える。そこでより明確な基準となるのが、deontic モダリティと epistemic モダリティである。

deontic モダリティと epistemic モダリティの観点から分類する本論文の方針とは違うものの、用法の判定を照らし合わせた結果、井戸(2013, 2014, 2017, 2018)が指摘する2種のナドの判定結果は、本論文の2種のナドの判定結果とほとんど一致していた。たとえば井戸(2013)がA用法のナドとしている(93a)は、「警察が学校にやって来るべきでない」という deontic モダリティ的意味があるため deontic 用法のナドであり、B用法のナドとされている(93b)は「警察が学校にやって来ないのは当たり前なことだ」という epistemic モダリティ的意味があるために epistemic 用法のナドといえる。つまり本論文の deontic 用法のナドが井戸(2013)等のA用法のナドと対応し、epistemic 用法のナドはB用法のナドと対応している。

ここで、deontic 用法のナドと epistemic 用法のナドの考え方を、井戸(2013)の分類で問題が生じていた(95)に当てはめてみる。

- (95) a. 太郎は、身体に悪いと思っていながら、**煙草など** {を/* ϕ } 止められなかった。
[井戸 2013: 70, (i)]
- b. 太郎は、身体に悪いと分かっているのだから、**煙草など** {*/ ϕ } すぐ止めるべきだ。
[井戸 2013: 70, (ii)]

述部に「べきでない」と「のは当たり前だ」のどちらを後続させると文の解釈としておさまりがよいか見ると、(95a)には「煙草を止められないべきでない」と解釈でき、deontic モダリティがある。また(95b)は「煙草はすぐ止めるべきなのは当たり前だ」という epistemic モダリティが読み取れる。したがって(95a)は deontic 用法のナドであり、井戸(2013)でいうA用法のナド、(95b)は epistemic 用法のナドでB用法のナドということになり、これはA用法のナドの方には格助詞が後接するという特徴にも合致している。井戸(2013)の方法では、(95)のように述部の否定的評価を読み取りづらい場合、まず文から読み取れる否定的評価((95)においては「煙草は止めるべきだ」という「煙草」に対する評価)を定め、その

²¹ たとえば、このような例がある。

- (i) 「うちの方が経済よ。それに、お料理だって、お商売屋さんには負けないように作るわ」
その通り、町の料理屋**など**より美味しいものを出した。 [鬼の末裔]
- (ii) それも別居中の旦那が言うには、自分が出した金で買った物がほとんどで信子の私物**など**
無いに等しいのであった。 [下下戦記]

述部の肯否を見極めるのは難しいが、deontic/epistemic の観点から分類すると(i)も(ii)も epistemic 用法のナドになる。

上で文の述部の評価と肯否が逆転しているか否か（述部が否定的かどうか）を見なければならなかった。工数が多い上に明確に判断しにくいいため、ゆれが生じやすい。また、格助詞の後接の有無も参考にしたようであるが、A用法のナドであっても格助詞を後接できない場合があるため、格助詞の後接の有無に依拠すべきではない²²。ところが deontic モダリティ、epistemic モダリティを用いると2種の区別が分かりやすく、さらに格助詞が後接するか否かという項目を手掛かりにする必要もない。したがって、ナドを二分する定義には deontic 用法、epistemic 用法を用いるほうがよいと考える。なお、(95)のように井戸(2013)等の分析内で矛盾を起こしてしまうような文を単に述部の肯否で分類した場合の判定結果と、本論文の主張に基づいて分類した場合の判定結果を比較すると、A用法のナドと deontic 用法のナド、B用法のナドと epistemic 用法のナドは一致しなくなる。これが井戸(2013)等のナドの判定結果と本論文での判定結果が異なることになる数少ない例である。

他にも井戸(2013)の分析に異を唱えたい点がある。井戸(2013)は、(95)の両文から「煙草は止めるべきだ」という「煙草」に対する評価が読み取れると指摘していることを先述した。

- (95) a. 太郎は、身体に悪いと思っていながら、**煙草など** {を/* ϕ } 止められなかった。
[井戸 2013: 70, (i)]
- b. 太郎は、身体に悪いと分かっているのだから、**煙草など** {*/ ϕ } すぐ止めるべきだ。
[井戸 2013: 70, (ii)]

しかし(95a)から一般にその評価を想起できるとは必ずしも言い切れないのではなかろうか。(95a)を見た後に「煙草は止めるべきだ」という解釈ができるかと問われるとすれば、同意する人も多いとは思いますが、(95a)を見ただけでその評価が自ずと想起されるとは考えにくい。ナドAとナドBの双方から「べき」に関する評価が読み取れるとする井戸(2013)の指摘は、(95)の例に限られた話ではなく、井戸(2014)においても、ナドの2用法を用いた文はいずれも「すべきではない」という話者の評価が感じられると指摘している。この「すべきではない」という評価は、本論文で指摘してきた deontic モダリティに該当している。つまり井戸(2014)は2用法のどちらにも deontic モダリティの意味が付されるとしていることになる。しかしすべてのナド文に deontic モダリティがあるわけではないことは指摘してきた通りである。

- (97) 名家の出身で舌が肥えている太郎はファミリーレストランの味が苦手で、カップラーメン**など**食べたことがない。

²² 詳細は 5.6 節で述べている。

(97)は「(舌が肥えている太郎が) カップラーメンは食べたことがないのが当たり前だ」という epistemic モダリティがある。deontic モダリティ的意味である「カップラーメンを食べないべきでない」という解釈をすることはできない²³。したがって、ナドには意味的に2種類あることは明確である。井戸(2013, 2014)の指摘のように、2種のナド文に現れる意味を一括りにして、すべて「べきでない」という評価をもたらすと捉える指摘は十分と言い難い。

以上より分類方法については同意しかねるが、分類結果が大方一致していることから、以降は井戸(2013, 2014, 2017)²⁴が A 用法のナド、B 用法のナドについて示していることは原則的にそれぞれ deontic 用法のナド、epistemic 用法のナドにも適用できるという仮定のもと、論を展開する。

井戸(2017)では、A 用法のナドと B 用法のナドで振る舞いに違いが現れる点をいくつか指摘している。指摘点の概要を表(98)にまとめた。A 用法のナド文と B 用法のナド文において、評価項目の内容が可能ならば「○」、不可能ならば「×」を付している。

(98) A 用法のナドと B 用法のナドの違い

評価項目	ナド A (述部が肯定)	ナド B (述部が否定)
Yes-No 疑問文の作成	○	×
サエの後接	○	×
コピュラの後接	○	×
格助詞の後接	○	×

なお、井戸(2017)は表(98)に挙げている項目のほかに、「主語からの焦点の拡張」という項目も指摘していた。しかし、本論文ではこの項目をナドの2用法の違いだと認めない立場をとるため、表(98)から除外している。ここでは指摘を認めない理由も含め、井戸(2017)の当該指摘項目を確認しておく。「主語からの焦点の拡張」とは、ナドが主語に後続した場合に、主語だけでなく動詞句までもがナドの焦点に含められるということである。井戸(2017)は、A 用法のナドは主語からの焦点の拡張ができないが、B 用法のナドは主語から

²³ 本論文では、分類時点での恣意的な作業を取り除くために、deontic モダリティの判定は述部にそのまま「べきでない」を後接することで行っている。したがって、(97)の deontic モダリティ判定をする際も述部の肯否を変えて「カップラーメンを食べるべきでない」とはしていない。なお、仮に「カップラーメンを食べるべきでない」として deontic モダリティを判定したとしても、この解釈は(97)から得られるものではなく、判定結果は変わらない。

²⁴ 井戸(2018)では A 用法、B 用法という呼び方をしていない。

の焦点の拡張ができると指摘している。なお、井戸(2017)で用いられる「焦点」とは、本論文で論じてきた「scope」と同様のものを指すようである。²⁵

- (99) a. あんなところで、[誰かが走り]などしている。 [井戸 2017: 53, (36a)]
b. *あんなところで、[誰か**など**が走って]いる。 [井戸 2017: 53, (36b)]
- (100) a. あんなところで、[誰かが走り]などするはずがない。 [井戸 2017: 53, (37a)]
b. ?あんなところで、[誰か**など**走る]はずがない。 [井戸 2017: 53, (37b)]

(99)は A 用法のナドの例、(100)は B 用法のナドの例である。例中の[]は、主語を含んだ動詞句を示すものである。(99a)、(100a)はそれぞれ動詞句末にナドが後接し、どちらのナドも動詞句を焦点にとっている。一方主語の不定名詞にナドが付加した(99b)、(100b)は、容認性に非対称性がある。まず B 用法のナドである(100b)は、ナドが主語に後接しているが、ナドの焦点を主語「誰か」から拡張させ、「(あんなところで) 誰かが走る」という事態に対して軽視・謙遜的な評価を持たせることができる。しかし A 用法のナドである(99b)は、ナドの焦点はナドに前接する主語だけが該当しており、「誰か」単体に軽視・謙遜的な評価を下し、焦点の拡張はできない。以上が井戸(2017)の指摘であり、主語に後接する A 用法のナドの焦点は、主語から拡張して動詞句全体をとることができないとされている。しかし、この特徴が一般的なものであるのかという点には疑問が残る。

- (101) (薄暗い公園を指して) あんなところで、[幼児**など**が遊んで]いる。

(101)に用いられているナドは deontic 用法のナド、もとい A 用法のナドであり、ナドは主語に後続している。したがって、井戸(2017)の指摘によると主語からの焦点の拡張ができないはずである。(101)は、主語の「幼児」だけがナドの作用域であると捉えることも可能ではある。しかし、動詞句まで拡張して「幼児が(あんな物騒なところで)遊んでいる」というデキゴト自体がナドの作用域であるとする解釈も十分に可能であり、本論文では、むしろこちらの方が文の解釈としてより妥当性があると考えられる。本論文の主張に基づいて(101)の focus/scope を示すと、(101)は focus が「幼児」、scope が「幼児が遊んでいる」であり、すなわち作用域は主語から拡張できるという主張をしてきた。したがって、deontic 用法に通じる A 用法のナドが主語に後接したとき、ナドの焦点は主語から拡張できないとする井戸(2017)の指摘は本論文の主張に馴染まない。なお、井戸(2017)が例として挙げた(99b)は、たしかに主語からの焦点の拡張ができないように感じられる。しかしこれは、主

²⁵ 井戸(2017)は、「焦点」を「作用域」と換言するときもあるなど、「焦点」を作用域と捉えているようである。本論文では「focus」と「scope」を用いたが、このうち作用域は「scope」のほうである。

語が不定名詞句であることが作用しているのではないかと考える。井戸(2017)は主語が不定名詞句になっている例以外を挙げていないため、不定名詞句以外の名詞句が主語になる場合に対する井戸(2017)の考えは分からないが、可能性として挙げておく。

以上の理由より、「主語からの焦点の拡張」はナドの2用法の振る舞いに違いがあるとは考えないが、そのほかの井戸(2017)の指摘点は deontic 用法のナド、epistemic 用法のナドにも通じるものがあると考え。次節からは、表(98)にまとめている、ナドの2用法で違いが現れる4つの現象を詳細に確認し、その違いが現れる理由を deontic/epistemic の観点から説明することを試みる。

5.3. Yes-No 疑問文の作成

井戸(2017)は、ナド A かナド B かによって、ナド文を Yes-No 疑問文にできるか否かという点に違いがあると指摘する。

(102) a. よりにもよって、警察**など**が学校に来た。

b. よりにもよって、警察**など**が学校に来たの？ [井戸 2017: 57, (45a)]

(103) a. 警察**など**学校に来なかった。

b. *警察**など**学校に来なかったの？ [井戸 2017: 57, (45b)]

(102)、(103)はそれぞれ A 用法のナド、B 用法のナドの例である。また(102a)、(103a)は共に平叙文であり、それぞれを Yes-No 疑問文にしたものが(102b)、(103b)である。ナド A の Yes-No 疑問文である(102b)は容認できるが、ナド B の(103b)は容認性が低い。また、仮に容認できたとしても軽視・謙遜のナドの意味ではなく、例示のナドの意味が現れてしまう。したがって軽視・謙遜のナドであるナド B 自体は Yes-No 疑問文にできない。

以上を deontic 用法のナド、epistemic 用法のナドに適用すると、次のようにまとめられる。

(104) deontic 用法のナドならば Yes-No 疑問文にすることができるが、epistemic 用法のナドならば Yes-No 疑問文にできない。

(104)を deontic/epistemic の観点から説明することを試みる。ここで、中右(1994)は deontic モダリティは発話態度を表し、epistemic モダリティは命題態度を表すとしている。

(105) a. 発話態度とは、一定の談話コンテキストのもとで話し手がみずからの発話行為についていただく何らかの意識（意図、姿勢）のことである [中右 1994, 41]

- b. 命題態度とは、命題内容の真理値（真か偽かの値）について話し手がくださ査定判断のことである [中右 1994: 41]

中右(1994: 41)は、発話態度と命題態度はどちらも命題内容の増減にはかかわらないものの、これらの分岐点は「命題内容の真理値（真偽いずれかの値）に対して何らかの信任態度を表明しているかどうかである」と説明している。つまり、epistemic 用法のナドは命題内容の真理値に対して話者の何らかの信任態度を表明する一方、deontic 用法のナドは表明しないということである。epistemic 用法のナドが表す話者の信任態度を、聞き手に Yes-No 疑問文の形式で尋ねることはおかしい。したがって、話者の信任態度を表す epistemic 用法のナドは Yes-No 疑問文にできないといえる。なお井戸(2017)は、B 用法のナドが(106a)のように聞き手の心の内を問う「～と思うの？」や、話者自身が考えていることを聞き手に確認するような(106b)の「～よね？」を用いると疑問文にできると指摘している。この B 用法に関する指摘も epistemic 用法のナドに通じる。

- (106) a. あなたは「警察**など**学校に来ない」と思うの？ [井戸 2017: 58, (47a)]
b. 警察**など**学校に来なかったよね？ [井戸 2017: 58, (47b)]

(106)の観察は、epistemic 用法のナドが話者の命題に対する信任態度を表す性質を持つことを考えると、当然の帰結である。

反例について、deontic 用法のナドにもかかわらず Yes-No 疑問文にすることができない例は見当たらなかった。しかし epistemic 用法のナドにもかかわらず Yes-No 疑問文にすることができる例はあった。それは、ナドが一般に否定的な評価を持たれている語に後続する場合である。

- (107) (感染すると死亡するウイルスが蔓延している地球を脱出して、新しい星に向かうときの子どもの発言)
新しい星には本当にウイルス**など**存在しないの？

(107)は epistemic 用法のナドであるが、Yes-No 疑問文にすることができている。この理由は、ナドが付加している「ウイルス」が一般に否定的に捉えられており、ナドによってもたらされる軽視・謙遜の評価は、もはや話者が個人的に持つ認識ではなく、共通認識であるためだと考える。したがって、(107)は Yes-No 疑問文であっても「ウイルス」への軽視・謙遜の評価が共通認識として前提にされた上で、その存在の有無を尋ねることができる。以上より、epistemic 用法のナドであっても、ナドの前接部が一般に軽視・謙遜の対象として広く認知されている場合、それは epistemic モダリティの意味が保持されたまま Yes-No

疑問文にできるといえる。

5.4. サエの後接

井戸(2017)は、サエの後接についてナド A とナド B で異なる振る舞いを見せると指摘する。次の(108)は A 用法のナドの例、(109)は B 用法のナドの例である。

- (108) a. 警察**など**が学校にやって来た。 [井戸 2017: 55, (41a)]
b. 警察**など**さえ学校にやって来た。 [井戸 2017: 55, (41b)]
- (109) a. 警察**など**学校にやって来なかった。 [井戸 2017: 55, (43a)]
b. #²⁶警察**など**さえ学校にやって来なかった。 [井戸 2017: 55, (43b)]

(108a)は「警察は学校に来るべきでないのに、その警察が学校にやって来た」という解釈が、(109a)は「警察は学校にやって来ないのが当たり前存在であり、その通り警察は当然学校にやって来なかった」という解釈が可能である。井戸(2017)は、これら双方に「学校にやって来ることはふさわしくない」という「警察」に対する評価が共通すると指摘している。A 用法のナドにサエを後接した(108b)も同様の評価を読み取ることができ、「警察は学校に来るべきでないのに、その警察までもが学校にやって来た」という解釈が可能である。しかし B 用法のナドにサエを後接した(109b)だけは、「警察」の評価が上記3つと異なる。(109b)の解釈は「警察は学校に来てしかるべき存在の一つだったのに、その警察すら学校にやって来なかった」となり、「警察」への評価は「学校にやって来るべき存在の一つ」となっている。つまり、「警察」に対して軽視・謙遜の意味はもたらされておらず、ナドは例示的意味を付している。したがって B 用法のナドにサエを後接すると、ナドは例示用法のナドになるといえる。換言すると、軽視・謙遜である B 用法のナドは、その役割を保持したままサエを後接することができない。

なおこの特徴の観察ができるのは、文法的にナドにサエを後接できる場合のみである。ナドにサエを後接できない例としては、次のようなものがある。

- (110) a. 情というものはべとべとして、封建的で古くさいものだ、情緒**など**というものは人間の冷静な判断を妨げる、とされてきたのです。 [いまを生きるちから]
b. *情というものはべとべとして、封建的で古くさいものだ、情緒**など**さえというものは人間の冷静な判断を妨げる、とされてきたのです。

²⁶ 井戸(2017)では、文法的に不可ではないが意図している解釈とは異なる解釈となることを#で表している。本論文でも、#を同様の意味で用いる。

(110a)のナドにサエを後接させたものが(110b)であるが、ナドには「というもの」が後接していることから、ナドの直後に助詞を入れることはできない。ナド文の大多数は文法的にナドにサエを後接することができるが、(110)のように一部例外もある。

以上を deontic 用法のナド、epistemic 用法のナドに転用すると次のようにまとめられる。

(111) ナドにサエを後接できるとき、deontic 用法のナドならば deontic モダリティを持ったままサエを後接できるが、epistemic 用法のナドならば epistemic モダリティを持ったままサエを後接できない。

(111)を、deontic/epistemic の観点から説明を試みる。まずはサエの整理をしておく。沼田(2009)は、サエがとりたて詞の一つであり、「意外」のサエと常に条件節中に現れる「最低条件」のサエに分けることができると指摘する。

- (112) a. 雑巾**さえ**満足に縫えない。 [沼田 2009: 171, (1a)]
b. 彼なら、問題点**さえ**わかれば、自分で修正できる。 [沼田 2009: 171, (1e)]

(112a)が「意外」のサエの例、(112b)が「最低条件」のサエの例である。「最低条件」のサエは常に条件節中に現れるという制約があるが、ナドにサエが後接した「などさえ」が条件節中に含まれる場合は限定的であり、かつ述部の範囲を条件節内にとどめるのか、条件節外も含めるのか議論の余地があるため、ここでは「意外」のサエがナドに後接する場合を考察する²⁷。(112a)における「意外」のサエは、「雑巾」に「縫えて然るべきもの」という評価を与え、この「縫えて然るべき雑巾」すら満足に縫えないことが意外だと示す。つまりサエは、文に表出された事態((112a)では「満足に縫えない」)が、サエの前接部((112a)では「雑巾」)から予想される事態に反していることを示している。このとき、サエがもたらす「意外」という解釈は、「蓋然性が高い」事態を示す epistemic モダリティとは逆の方向性を持つ。条件節ではない文にサエが現れたとき、サエは「意外」の意味を持つしかなく、文には意外性を示す解釈が現れる。一方ナドは、軽視・謙遜だけではなく例示の意味も持っているため、サエが含まれる文においては、サエの「意外」に反する epistemic 用法のナドの意味は選択されず、意味が干渉しない例示のナドの意味が選択されるのだと考える。こうして、サエの後接に関する本現象も deontic/epistemic を踏まえる本論文の主張から説明することができる。

²⁷ 「最低条件」のサエがナドに後接する例としては、次のようなものがある。

(i) トイレ掃除**などさえ**しっかり取り組んでいれば、怒られることはなかった。

5.5. コピュラの後接

井戸(2017)は、ハ分裂文²⁸におけるコピュラの後接の可否も、2種のナドで異なると指摘している。

- (113) a. 二次会に来たのは、よりもよって嫌われ者の太郎**など**だった。
b. よりにもよって、嫌われ者の太郎**など**が二次会に来た。 [井戸 2017: 49, (24)]
- (114) a. #二次会に来なかったのは、嫌われ者の太郎**など**だった。
b. 当然、嫌われ者の太郎**など**二次会に来ない。 [井戸 2017: 49, (26)]

(113a)はナド A の文(113b)をハ分裂文にしたもの、(114a)はナド B の文(114b)をハ分裂文にしたものである。(113a)のように、ナド A であれば文の意味を変えずにコピュラを後接できる。一方ナド B の文である(114a)は、文法的に不可ではないが、ナドが軽視・謙遜のナドの意味ではなく、例示のナドの意味になってしまう。したがってナド B は、軽視・謙遜を示し、かつ epistemic モダリティ「当たり前だ」を付すという特性を持ったままコピュラを後接することができない。

なお、コピュラの後接の可否を確かめるには、ナド文がもともとハ分裂文ではない場合、一度ハ分裂文を作成する必要がある。しかし軽視・謙遜のナドを用いる文の中には、(115)のようにハ分裂文を作成できないものもある。

- (115) 花子は、(あの)太郎**など**が背が高いのを見て、(驚いた)。
[井戸 2017: 107, (29a)]

したがってコピュラ後接の振る舞いの違いが見られる対象はハ分裂文か、もしくはハ分裂文を作成できる場合に限られる。以上をもとに、この特徴を deontic 用法のナド、epistemic 用法のナドに転用すると次のようにまとめられる。

- (116) ナドを持つハ分裂文か、ナド文をハ分裂文にできるとき、deontic 用法のナドならば deontic モダリティを持ったままコピュラを後接できるが、epistemic 用法のナドならば epistemic モダリティを持ったままコピュラを後接できない。

ハ分裂文の形式でしか観察できないため、(116)の汎用性は高いとはいえないかもしれない。

²⁸ 砂川(2005: 206)は、「分裂文」を「節が主語になり、その節から特定の成分が取り出されて述部に位置づけられているコピュラ文」としている。また「ハ分裂文」とは、分裂文のうちハを伴う「～のは～だ」を指している。本論文ではこの定義に則る。

しかし反例は管見の限り見つかっておらず、信頼度は高いと考える。

(116)を deontic/epistemic の観点から説明することを試みる。そもそもハ分裂文は、砂川(2005)が「コピュラ文の主語である節の中に含まれる不定の要素をコピュラ文の述語によって同定する文である」と指摘するものであり、(117)の構造をとるといえる。

(117) [Subject] のは [Predicate] だ (コピュラ)。

すなわち、ハの前は Subject となる。ここで、epistemic 用法のナドは Subject に後接するという特徴があった。epistemic 用法のナド文である(114)を改めて見る。

(114) a. #二次会に来なかったのは、嫌われ者の太郎などだった。

b. 当然、嫌われ者の太郎など二次会に来ない。 [井戸 2017: 49, (26)]

分裂文ではない(114b)において、Subject は「嫌われ者の太郎」、Predicate は「二次会に来ない」である。しかし分裂文にした(114a)は、次のような構造になってしまっている。

(118) [二次会に来なかったの (Subject)] のは [嫌われ者の太郎 (Predicate)] ナドだった。

epistemic ナド文の(114b)のときは Subject であつたはずの「嫌われ者の太郎」が、分裂文になることで Predicate となっている。同様に、Predicate であつたはずの「二次会に来ない」は、分裂文になることで Subject となる。このように、epistemic ナド文は分裂文にすると Subject と Predicate が入れ替わる。epistemic 用法のナドは Subject に後接するという特徴があったが、(114a)は本来 Subject であるべき句にナドが後接できていない。以上の理由より、分裂文(114a)は epistemic ナド文(114b)と同じ意味を持つことができないといえる。なお、ハ分裂文は Predication を表す文であるから、epistemic モダリティが表出してもよいと考える意見もあるかもしれない。しかし epistemic 用法のナドは、ナドの前接部が Subject だという規定がある上で、「[Subject]が[Predicate]は当たり前だ」という epistemic モダリティの意味を付すものである。(118)のように Predicate にナドが後接する場合は epistemic 用法のナドの規定外であるため、例示用法のナドになると考える。以上より、epistemic 用法のナドにコピュラを後接すると epistemic モダリティを失い、例示のナドになるという現象も deontic/epistemic の観点から説明が可能である。

5.6. 格助詞の後接

5.2 節でも触れたが、井戸(2017)はナドに格助詞を後接できるか否かという点についても

ナドの2種に違いが現れると指摘している。

(119) a. よりにもよって、警察**など** {が/? ϕ } 学校にやって来た。 [井戸 2017: 45, (14a)]

b. 警察**など** {#が/ ϕ } 学校にやって来なかった/来るものではない。

[井戸 2017: 45, (14b)]

(119a)はナド A を用いており、格助詞を後接する。むしろ格助詞を後接しない場合は容認性が低い。一方(119b)はナド B を用いており、格助詞を後接しない場合は軽視・謙遜のナドとして容認できるが、格助詞を後接すると例示用法のナド的な解釈になってしまい、軽視・謙遜のナドではなくなる。したがって、井戸(2017)は軽視・謙遜のナドである B 用法のナド自体は格助詞を後接できないと指摘している。しかし、ナド A にもかかわらず格助詞を後接できない例がある。

(120) よりにもよって、花子は学校に行かず、部屋に籠り**など**している。

[井戸 2017: 52, (34a)]

(120)は述部が肯定的であり井戸(2017)がナド A と判定している文であるが、ナドに格助詞を後接する場合よりも格助詞を後接しない場合のほうが自然である。これは、ナドの前部が動詞であることに由来する。deontic 用法のナドは(120)のように動詞の連用形に後接する場所があるのだが、このとき格助詞はナドに後接できない。以上を踏まえ、格助詞の後接に関する井戸(2017)の指摘を deontic 用法のナド、epistemic 用法のナドに転用すると、(121)のようにまとめられる。

(121) ナドの前接部が名詞の場合において、deontic 用法のナドならば格助詞を後接できるが、epistemic 用法のナドならば格助詞を後接できない。

(121)の特徴は、5.1 節で示した(90b)、(91b)より deontic モダリティ、epistemic モダリティに基づく説明が可能である。

(90) b. deontic 用法のナドは項に後続することが観察されるが、これは deontic モダリティが description を表す文に関連するためである。

(91) b. epistemic 用法のナドは Subject に後続することが観察されるが、これは epistemic モダリティが Predication を表す文に関連するためである。

格助詞は、項に後続する分には相性がいいが、Subject に後続するには座りが悪い。したがって、ナド句が項にあたる deontic 用法のナドには格助詞が後接でき、ナド句が Subject となる epistemic 用法のナドには格助詞が後接できないといえる。

なお、epistemic 用法のナドにもかかわらず格助詞を後接できるという反例がある。まず、4.1 節で触れた「格助詞+ハ」の形で後接できる場合がある。

- (64) 彼は「キリスト教を受け入れれば、俗世の生活や活動のわずらわしさから逃避して、いくじのない、女々しい手合いになる」という観念を否定するため、ローズヴェルト調に「道徳的戦いは厳しい人間をつくり、表面的平和は脆弱な人間をつくる」と断言した。さらに告白の場では、みずからの気質を要約して「罰をあたえぬ神などには関心がない」と述べている。 [「アメリカの反知性主義」]

(64)ではハが後接する「罰を与えぬ神などに」が Subject となっている。epistemic 用法のナドは Subject に後接するため、ハとの相性がよいことは既に述べたが、ハによって取り立てられる Subject の内部においてはナドに格助詞が後接できる。したがって、(121)を次のように改める。

- (122) ナドの前部が名詞の場合において、deontic 用法のナドならば格助詞を後接できるが、epistemic 用法のナドならば、格助詞にさらにハが続く場合を除いて格助詞を後接できない。

その他の epistemic 用法のナドにもかかわらず格助詞が後接できる反例には、(123)がある。

- (123) 花子など研究者になるはずがない。 [井戸 2017: 42, (4a)]

(123)は、井戸(2017)でナド B の文であると判定されており、かつ epistemic 用法のナド文と判定できる文である。しかし(124)のように格助詞の後接も可能だと考える。

- (124) 花子などが研究者になるはずがない。

(123)を epistemic 用法のナドと判定できるのは、Predicate を「なるはずがない」と捉えた上で「花子は研究者になるはずがないのが当たり前である」という epistemic モダリティでの

解釈が可能であり、「花子は研究者になるはずがないべきでない²⁹」という deontic 解釈はできないからである。しかし仮に動詞句を「なる」のみで切り取ると、「花子は研究者になるべきでない」と deontic モダリティを読み取ることができる³⁰。これは注 19 で指摘した通り述部として切り取る範囲次第で deontic 用法／epistemic 用法の判定が変わってしまう例なのだが、このような場合、epistemic 用法のナドと判定できる文でも格助詞が後接できる例に繋がると考える。つまり、動詞句「なるはずがない」は「なる」のみで切り取ることも可能であって、この「なる」は deontic モダリティを受け入れるため、ナドの後ろに「なる」があることで deontic 用法のナドと混同が起きるのではないかと推定する。しかし推測の域を出ず、更なる考察が必要である。

²⁹ 容認性が低い文ではあるが、文の動詞句にそのまま「べきでない」を付した deontic モダリティの解釈ができるか否かというテストをしているため、述部を恣意的に変えて「花子は研究者になるべきでない」のようにはしない。

³⁰ 井戸(2017)も、述部「なるはずがない」に否定辞があるため(123)を B 用法のナド文と判定している。しかし述部を「なる」のみだと捉えると、述部に否定的評価がないため、A 用法のナドと判定することもできる。したがって述部として切り取る範囲次第で A 用法／B 用法の判定が変わるのは、井戸(2017)も同様である。

6. おわりに

本論文では、軽視・謙遜のナドと呼ばれるナドが文にもたらす意味には2種類あると考え、次の問いを立てた。

- (5) 軽視・謙遜のナドは、意味的側面から見るとどのように分類できるか。また、それぞれの統語的特徴はどのようなものか。

考察の結果を(125)、(126)、(127)にまとめる。

- (125) 軽視・謙遜のナドは、文にもたらす意味の違いから deontic 用法のナドと epistemic 用法のナドに二分できる。

(126) deontic 用法のナドの場合

- a. deontic 用法のナドと音形を持たない deontic モダリティが共起する。
- b. deontic 用法のナドは、その前接部が deontic モダリティの focus (非難対象) であることを示す。
- c. deontic モダリティはデキゴト³¹を項にとり、それに対して「すべきでない」という当為に関する意味を付す。focus であるナド句は、deontic モダリティの scope であるデキゴト内に含まれる。

(127) epistemic 用法のナドの場合

- a. epistemic 用法のナドと音形を持たない epistemic モダリティが共起する。
- b. epistemic 用法のナドは、その前接部が epistemic モダリティの focus (注目対象) であることを示す。
- c. epistemic モダリティは注目対象と事象³²の2つを項にとり、「その注目対象にとっては、その事象が当たり前だ」という蓋然性の高さを示す意味を付す。focus であるナド句は、事象内から Subject の位置に移動する。

さらに、ナドは(39)、(71)の形で **Lexicon** に登録されることも提案できた。

- (39) a. **Lexicon** における deontic 用法のナドの語彙項目
[{Z, <target, ●>}, φ, など]

³¹ デキゴト (event) は、状態 (state) に対立する概念を指す。

³² 事象 (eventuality) は、デキゴト (event) と状態 (state) をどちらも内包する概念を指す。

- b. Lexicon における deontic 用法のナドと共起する deontic モダリティの語彙項目
 [φ, <id, {<非難対象, ★_{target}>, <すべきでない, ★>}>, φ]

- (71) a. Lexicon における epistemic 用法のナドの語彙項目

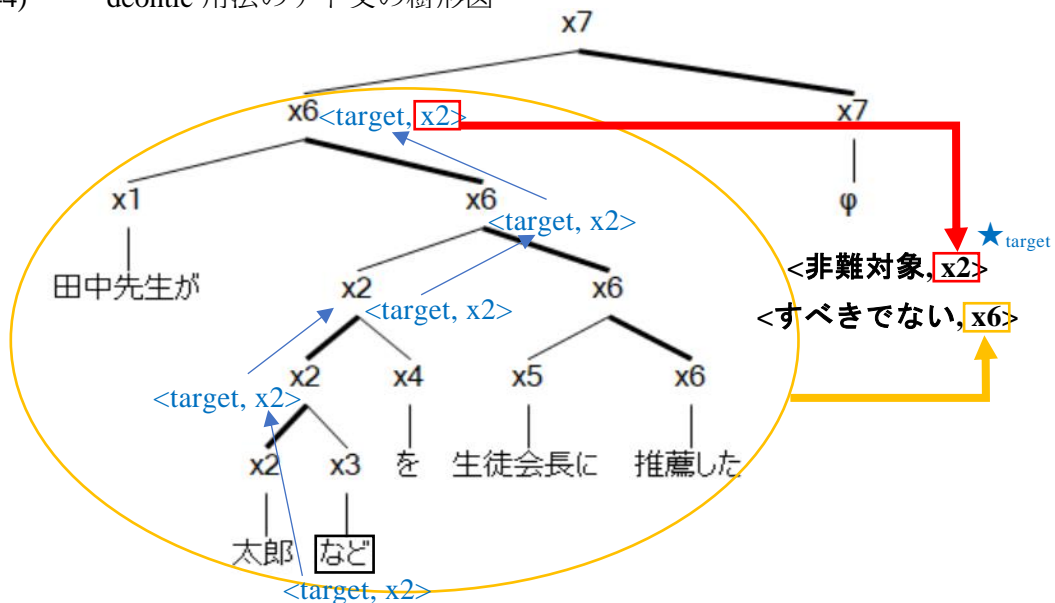
[{Z, nado}, φ, など]

- b. Lexicon における epistemic 用法のナドと共起する epistemic モダリティの語彙項目

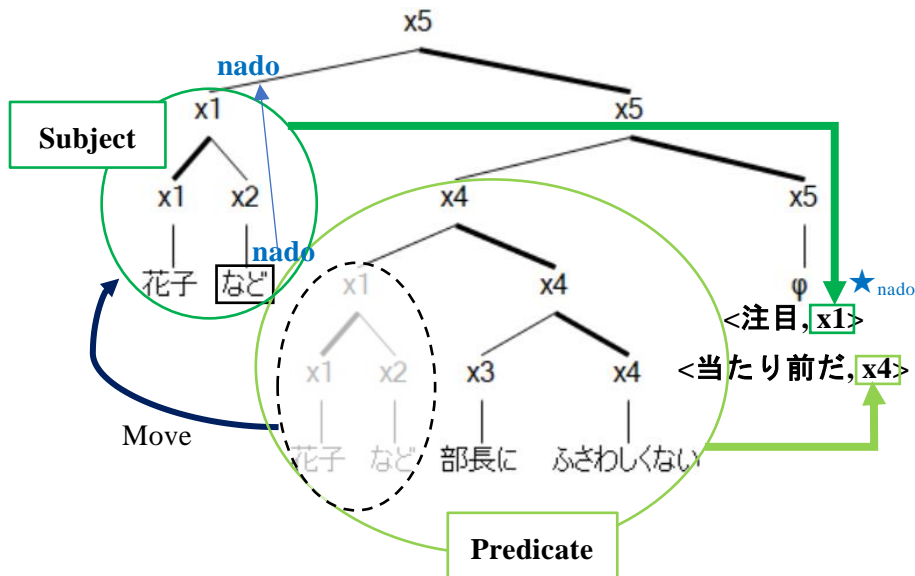
[φ, <id, {<Subject, ★_{nado}>, <注目, ★_{nado}>, <Predicate, ★>, <当たり前だ, ★>}>, φ]

これらをナド文において派生させると、次のような構造になる。

- (44) deontic 用法のナド文の樹形図



- (78) epistemic 用法のナド文の樹形図



本論文が提案する Lexicon におけるナドの登録の形式が、今後、ナドのような助詞の Lexicon での登録形を定める際の一助となることを期待する。

しかし、そもそも軽視・謙遜のナドと例示のナドの違いを論じることはできていない。この点を明らかにすれば、たとえば epistemic 用法のナドに格助詞を後接すると例示のナドの解釈になる過程などを詳細に示すことができるだろう。引き続き考察が必要である。

本論文の主張の妥当性を検討するために、6章では軽視・謙遜のナドの先行研究である井戸(2013, 2014, 2017, 2018)と比較をした。井戸(2013)等の研究ではナドと共起する述部の肯否に着目しており、さらに両用法のナド文には「すべきではない」という意味があるとして一括りにまとめている面もあった。しかし述部の肯否で分けることは問題点もあることから明確な分類基準となっていないことを示し、本論文の主張である deontic/epistemic に沿った区分を採用すると、井戸(2013)等での問題点が解消されることを見た。一方、井戸(2017)はナドの2用法で振る舞いが異なる現象を複数指摘しており、このことから、やはりナドを二分する必要性があることが分かる。かつ、ナドの2用法に見られる振る舞いの違いは deontic/epistemic から説明できることも多く、本論文の妥当性が確認できた。

以上より、deontic/epistemic を用いた本論文の考察は、軽視・謙遜のナドがもたらす意味の違いに着目することで従来の研究よりも明確に軽視・謙遜のナドを分類できること、deontic/epistemic の対立から構造の違いも指摘できること、そしてこれまでに指摘されてきた、軽視・謙遜のナドの2種で振る舞いが異なる現象の説明が可能なことを示すことができた。

参照文献

- 井戸美里 (2013) 「否定的な評価を表す二種類のとりたて詞ナド」 『日本語文法』 13(1): 68-83.
- 井戸美里 (2014) 「単一／複合判断の表出と否定的評価を表すナドの2種」 『筑波応用言語学研究』 17: 17-27. つくば: 筑波大学大学院博士課程文芸・言語研究科応用言語学コース.
- 井戸美里 (2017) 「とりたて詞の統語と意味から見る日本語否定極性表現の研究」 博士論文, 筑波大学.
- 井戸美里 (2018) 「「は」の後接から見るとりたて詞の否定呼応現象」 『国立国語研究所論集』 15: 43-54.
- 井島正博 (2008) 「クライ・ホド・ナド・ナンカ・ナンテの機能と構造」 『日本語学論集』 4: 42-97.
- 黒滝真理子 (2005) 『Deontic から Epistemic への普遍性と相対性 モダリティの日英語対照研究』 東京: くろしお出版.
- 中右実 (1994) 『認知意味論の原理』 東京: 大修館書店.
- 沼田善子 (2009) 『現代日本語とりたて詞の研究』 東京: ひつじ書房.
- Palmer, Frank Robert (1986) *Mood and Modality*. Cambridge: Cambridge University Press.
- 砂川有里子 (2005) 『文法と談話の接点—日本語の談話における主題展開機能の研究—』 東京: くろしお出版.
- 高橋正 (2013) 「モダリティ表現の日英語対照研究(6): 可能性を表す can / could はどのような日本語表現と対応しているか?」 『英語英文学研究』 37(2): 19-42.
- 上山あゆみ (2007) 「文の構造と判断論」 長谷川信子 (編) 『日本語の主文現象: 統語構造とモダリティ』 113-144. 東京: ひつじ書房.
- 上山あゆみ (2015) 『統語意味論』 名古屋: 名古屋大学出版会.
- von Wright, Georg H. (1951) *An essay in modal logic: Studies in logic and the foundations of mathematics*. Amsterdam: North-Holland Publishing Co.
- 山田孝雄 (1908) 『日本文法論』 東京: 寶文館.

用例採取資料

国立国語研究所「現代日本語書き言葉均衡コーパス」より

五木寛之 (2005)『いまを生きるちから』東京：日本放送出版協会.

三橋一夫 (2005)『鬼の末裔』東京：出版芸術社.

水野良 (1997)『湖岸の国の魔法戦士 魔法戦士リウイ』東京：富士見書房.

小倉厚 (1996)『定年後は山歩きを愉しみなさい』東京：明日香出版社.

リチャード・ホーフスタッター(著)／田村哲夫(訳) (2003)『アメリカの反知性主義』東京：み
すず書房.

斎藤正彦 (2002)『老人病院 青梅慶友病院のこころとからだのトータルケア』京都：昭和堂.

瀬戸内寂聴 (1988)『新寂庵説法 愛なくば』東京：講談社.

須田慎一郎 (2004)『UFJ 消滅 メガバンク経営者の敗北』東京：産経新聞ニュースサービス.

田村明 (1995)『イギリスは豊かなり』東京：東洋経済新報社.

吉田司 (1987)『下下戦記』東京：白水社.

謝辞

本論文の執筆にあたって、親身なご指導と多大なご助言をくださった指導教員の上山あゆみ教授に、厚く御礼申し上げます。観察と分析を繰り返して考察結果に試行錯誤し、暗中模索の中、日夜問わず何度もご相談に乗ってくださったおかげで本論文をまとめることができました。上山教授との談話は、言語学の知識をご教授いただくだけでなく、学問への意欲が高められるような、満ち足りた時間でした。上山教授のもとで統語意味論に携わることができたこと、大変光栄に存じます。また、言語学・応用言語学研究室の教員である久保智之教授、下地理則准教授、太田真理講師の講義、演習のおかげで、言語学の多様な側面を知ることができ、本論文を書く下地を作ることができました。ご教授ありがとうございました。井戸美里氏（国語研究所）には、産後の大変ご多忙な時期にもかかわらず、直接お考えを伺うお時間を頂戴いたしましたこと、心より感謝申し上げます。本研究を進めるにあたり、多くの重要な知見を学ばせていただきました。上山ゼミに所属する大学院生の皆さま、聴講させていただいた「理論言語学研究Ⅳ」では、皆さまのご意見を拝聴する中で本研究のヒントを数多く得ることができました。また、本論文にご指摘をいただいたことにも、感謝の意を表します。上山ゼミの学部3年生の皆さまもご多忙の中ご意見をいただき、ありがとうございました。そして上山ゼミの同期の皆さま、長期にわたって本論文の執筆に励むことができたのは皆さまの頑張る姿に感化されたからです。共に卒業論文に取り組むことができよかったです。ありがとうございました。